吹き抜ける風

hisa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吹き抜ける風

【Ｎコード】
Ｎ７２３６Ａ

【作者名】
ｈｉｓａ

【あらすじ】
主人公碧が辿る、日常の中の非日常。一人の少女郁との出会いで碧は変わって行く。人は、一体何を思い、どの様に自分を導きだすのか。

第一章　樹

1、　樹

　きらきらと降り注ぐ眩しい位の日の光を、大樹の枝葉の間から覗くのが好きだった。
そこは自分以外誰も知らない場所で、楽しい時も悲しい時もどんな時でも大樹の側で過ごした。
どんな気持ちの時もその大きな樹はたくさんの葉で優しく包み込んでくれ、その太い幹で支えてくれた。
死ぬまで一生側を離れる事はないと思ったしそれが可能だと思っていた。
だが、期待とは裏腹に大樹との別れはあっという間に訪れた。別れから二日。もう大樹には触れる事が出来なくなってしまった。
それは、今までのなかで一番の絶望だった。すべては大樹がいたから、頑張る事が出来た。挫けそうになっても大樹が励ましてくれる様な気がしたから乗り越えて来たのに、もうあの大樹には触れることも出来ない。
和田郁は悲しげに大樹を仰いだ。
空を仰げば、大樹は今も昔も変わらずあの気持ちをうきうきさせる木漏れ日を作り上げているし、夜になれば葉の間から零れんばかりの星の瞬きを見せる。
今も昔も大樹は変わらない。
変わり果ててしまったのは自分だった。
郁はため息をついてその場にしゃがみ込んだ。この大樹に触れたい。
願えば願うほど胸の鼓動は早まるのにそれは叶わない。
郁はしゃがみ込んだまま大樹を仰いだ。長い髪が肩を流れる。白いワンピースに身を包んだ彼女は一昨日死んだ。だからもう大樹に触れられない。

飛んだ誤算だった。今朝はあんなに晴れていたのに今じゃこの土砂降りだ。
「本当についてねえな」
傘もないので突然の雨に濡れながら藤家碧は大学からの帰り道を走っていた。
午後の講義を終え、さて帰ろうとしたところにこの土砂降りだ。少し止むのを待とうかとも思ったが時間がないのを思い出し雨に濡れる覚悟を決めたのだった。
今日は自宅に高校の時の友人が遊びに来る予定なのだ。
急げ急げと心の中で呟きながら碧は自宅に続く下り坂を猛スピードで駆け下りた。
いつもの見慣れた道も雨の日に見ると大分感じが変わる。そんな感じもいいかも知れないなと碧は思った。今日は真夏の炎天下だったから、突然の雨がもんもんとした湿気を生み出し碧の体にまとわり付く。それだけが、気分を不愉快にさせるが、それ以上に碧は浮かれていた。
今日は友人が手に入れたなかなか手に入らない日本酒を持って来てくれるのだ。
酒好きの碧には堪らなく嬉しかった。
走った甲斐があって家には予定より早く帰り着いた碧は、雨で全身びしょ濡れだったのでシャワーを一浴びしようと風呂場へ向かった。
意気揚々と濡れた服を洗濯籠に放り出し、鼻歌交じりで碧は浴室に入った。
もう少しでここ数日楽しみにしていた銘酒の味を吟味する事が出来る。心が何時になく浮きだっていた。

一浴びした碧は無造作にくしゃくしゃとタオルで髪を拭きながら、二階の自分の部屋へ上がっていく。

碧の部屋は年頃の青年にしては物も少なく質素な部屋だ。だが物がごちゃごちゃしている部屋があまり好きではない碧はこの部屋が気に入っていた。
部屋の中央に配置されているテーブルに酒の席の準備をする。
乾き物の肴でも出すかと下のキッチンに降りていく途中で家のチャイムがなった。
「お、木内が来たな」
日本酒の持ち手が現れたと碧はキッチンから玄関へと進路変更をし、勢いよく玄関のノブを回した。
「よう。久しぶり。」
久しぶりに会った木内豊は変わらない笑顔を見せた。相変わらずだなと、変わらぬ友人を嬉しく思い、碧は豊を部屋へ招き入れた。
「碧。見て驚け！これがお前が死ぬ前に一度飲んでみたいと散々熱弁していた銘酒だ。」
豊は自信満々な得意げな表情で紙袋から取り出した日本酒を碧の前に置いた。
それを目の当たりにした碧は、比較的端麗な顔を一気に破顔した。
「豊でかした！いったいどうやって手に入れたんだよ。」
銘酒の瓶を手に取り騒ぐ碧の視線は銘酒に釘付けだ。豊はそんな様子を見ながら煙草に火を点け一服すると、
「親父がなんかで貰ってきたんだよ。でもうちの親父下戸だろ。うちにあっても宝の持ち腐れだしな。」
碧は一度見かけたことのある豊のおじさんの顔を思い出し、心の底から感謝した。
碧は満面の笑みで栓を開け豊と二人分を注いだ。
「木内の親父に感謝！」
乾杯の音頭を取り二人は銘酒に口をつけた。一口飲んだ瞬間熱い感覚が喉にしみ込み、碧は大満足で杯をテーブルに置いた。
それから二人は銘酒の味について一頻熱弁を交わした。

酒の味を散々楽しみ酔いが程よく回って来たところに、豊が重々しく口を開いた。
「お前、もう亜由美と五木の事は吹っ切れたのか？」
気まずそうに、だが心配そうに豊は碧の顔色を窺うように聞いた。
ーーーーーーーーーー亜由美と五木か・・・。
その名前を聞いて一瞬碧の表情が暗く翳ったのを豊は見逃さなかった。
やっぱりこいつ吹っ切れてないな。そう察した豊は軽くため息を吐いた。
つい、数週間前の出来事だった。
亜由美と五木が付き合っていたのを知ったのは。二人は高校の同級生だった。ただ、ただの同級生なら何も問題はなかったのだ。
問題だったのは、亜由美は碧の彼女であり、また五木は碧の親友だったのだ。
いつから二人の関係が始まったのかは知らない。むしろもう知りたくもなかった。碧は一度に彼女と親友を失ったのだ。
それからしばらくの間亜由美からしつこく携帯への着信とメールを受信したが、あまりの裏切りに碧は話しをする気にもなれなかった。そしてその対称的に五木からは何の音沙汰もない状態だ。
碧は正直こんな酷い仕打ちを受けたことは今まで経験した事がなかった。亜由美の事はとても大事にしていたのだ。だからその分余計にショックは大きかった。初めて付き合った相手だった。本気で大学を卒業したら結婚してもいいと思える位の相手だったのだ。それがどうだろう。いつの間にか自分の親友と碧の知らない所でくっ付いていたなんて。
五木の事だって、亜由美の件に拍車をかけた。寄りによって何で五木なんだ？他の知らない男なら一度の浮気位許してやれたのに。
それに五木だって何だって自分の親友の彼女に手なんか出すんだよ。俺たちの関係って所詮その程度の友情だった訳かよ。
考えたくなくても、気付けば二人の事ばかりが思考回路を占領し

た。四六時中どうにかしてやりたいと二人を怨んだ。
酷い裏切にどちらにも腹が立ってしょうがない。そして酷く悲しかった。こんなに胸が苦しい思いをしなければならないなんて。
「亜由美達の事は、確かにまだふっ切れてはいないけど、もう終わった事だから・・・」
「でもお前、話し合ってないんだろ？このまま終わらせていいのかよ？」
憂鬱そうに吐き出した碧の声は考えたくないという感じが手に取る様に感じ取れた。
それでも豊は言った。高校からずっと一緒にいる豊も碧の親友なのだ。心の底から今の碧が心配だった。碧がどれだけ亜由美の事を大事にしていたか側で見ていたのだから。
辛いけどこのまま終わらせて碧は後悔しないだろうか。
お節介だとは思ったが言わずにはいられなかった。また、豊も碧と同じように腹を立てていたのだ。親友の彼女に手を出すなんて。
「今は話す気にもなれないよ。今はこうして美味い酒を飲んでいる。この瞬間が一番幸せだって俺は気付いたの。もう亜由美と五木なんか知らん」
少々酔っ払っている碧はうんざりした後、百面相の様に酒に満足な顔を向け、そして最後にふてくされた子供の様な顔を豊に向けた。
本当はその事が気になって仕方なかった。でもそんなことは誰にも気付かれたくなかった。同情されるとますます惨めな気持ちになる。また、心配してもらってるのに、そういう風にしか思えなくなってしまっている自分がますます嫌だった。
「同情するなら新しい女紹介しろよ。」
わざとらしくにやにやしながら碧は言った。
豊は口元に苦笑の笑みを張り付け、
「酒の次は新しい女か。お前も懲りないな。」
湿っぽいのが嫌で言った台詞がうまい事返され、今度は碧が苦笑する番だった。

そして、一気に酒を喉に流し込み、一言。
「しばらく女はいらねえ」
「だろうな。」
豊は大きくかぶりを振って相槌をうった。

それからしばらく碧と豊は酒を飲み続けた。一旦は湿っぽい話になったが、久しぶりに会った二人はお互いの大学生活や、昔話に花を咲かせ短い時間だか充実した時間を過ごした。
久しぶりに気分転換になった碧はここ数日の落ち込んだ気分を束の間忘れる事が出来た。
ーーーーーーーーーーーー木内に感謝しないとな。
胸の内で、碧は呟いた。
今は一人でいる時間が一番苦痛だった。嫌でも思考は亜由美達の事を考え出してしまうから。一度考え出してしまったら、しばらくは心が猟奇にとりつかれてしまう。
あまりに亜由美を大事にしていたし、五木を心より信頼していた。だからその反動で碧は思考の中で何度も二人を殺した。あまりのショックに一度や二度では足りない位だった。そこにしか怒りや苦しみをぶつける事が出来ない事が余計に辛く、惨めだった。
誰かが側にいれば考えずに済むと、豊に泊まれと勧めたが、明日は朝一から講義があると振られてしまった碧は、豊を送りがてらコンビニへ行くことにしたのだった。
駅までの薄暗い街頭の裏路地を歩きながら豊は言った。
「お前さぁ、バイトまだ続けてるの？」
「まぁな。変えようかと思うけど家から近いしな。しかも楽だし」
にやけて言う碧に豊は笑った。
確かに、碧がまじめにバイトする姿は想像出来ない。高校の時の掃除当番ですらまともにやらなかった奴だったと改めて豊は思い出していた。
「楽な上に給料いいからな。どうせ事件なんか滅多に起きないしさ。

」
「そりゃそうだ。そんなにしょっちゅう何かあったらこの町終わりだよ」
とデパートの夜間警備員のバイトをしている碧に豊は返した。
何だかんだと話し込んでいるうちに二人は駅の前まで着いていた。切符を買うのを見届け、碧はまた憂鬱そうな表情で豊に言った。
「また連絡しろよ」
「おう。じゃあな。
あんまり考え込むなよ」
何の事か聞かずともあの事しかない。さっきまで明るかった碧の表情にあっという間に影が差したのが心配だった。
碧は豊のそんな気は知らず、軽く手を上げ、豊に背を向け歩き出していた。

そのまま真っ直ぐかえる気にもなれず、碧は駅からの帰り道をわざわざ遠回りした。
駅から離れると喧騒が嘘の様に静かなになる。いつもは近道する裏路地を避け、バイト先を迂回するルートを辿った。たまには散歩もいいかもしれない。
酔った体に夜風が気持ちいい。
今日は豊のおかげで大分気分転換が出来た。結局、自分を裏切るのもまた、救ってくれるのも友達なのだ。
「ちぇ。人って上手く出来てるよな」
軽くふてくされながら、碧は足元の小石を蹴飛ばした。小石はからからと音を立てながら雑草の生い茂る茂みの中に隠れてしまった。
やっぱりこの数年間を思い出すとそうそう立ち直れそうにないと改めて思う。碧の中では色鮮やかで、そして濃度の濃い記憶だ。心の奥深くに封印したくても、きらきらと色鮮やかなそれは自ら自己主張を始める。どうにかしたいのに、自分ではどうにも出来ない。とても歯がゆい気持ちでいっぱいになる。

亜由美の事を忘れる事なんて出来るのだろうか。かと言って、二人を許す気にも今はなれない。結局現状をどうする事も出来ないのだ。亜由美が浮気をしたのには自分にも多少なりと原因があったのかもしれない。そんな事も考えたが被害者意識が募る一方で、自分の非なんか一つも思いに耽っているうちに目的のコンビニが見えてきた。碧がバイトに行く前に夜食を買い込んで行くコンビニだ。個人経営の小さなコンビニで、品数もあまり多くはない上、夜の十二時になると閉まってしまう。地域密着の小じんまりとしたコンビニで、見るからにあまり流行ってはいなさそうなのが一目瞭然だが、碧はそんなコンビニの店主の醸し出す暖かい雰囲気が好きでよく立ち寄っていた。

見慣れた、オレンジ色の看板にちらりと視線を泳がせ入り口のドアを開けた。相変わらず店内はがらんとしていた。

特に買うものなんか決まっていなかったが店内を一通り見て周り、やっぱりこれかなと、さっきまで散々飲んでいた酒に手を伸ばした。嫌なことから逃げるにはこれがやはり一番なのである。

発泡酒の缶を手に取り碧はレジへ向かった。レジ横に置いてある呼び鈴を鳴らすと、店の奥の方から店主がゆっくりと出てきた。いつもの見慣れた光景である。

カウンター越しに馴染みの顔を見つけた店主はにこりと笑いかけた。碧もつられて暖かい笑みを向けた。

お会計を済まし、店内に入る前より明らかに暖かい気分で店を出た。ここに来ると、毎度の事ながら、和やかな気持ちになれることを碧は知っていた。どうやったらあんなに雰囲気だけで人を和ませる人になれるのだろう。

これは人生の課題かもしれない。なんて事をふと思い、碧は可笑しくなった。

ーーーーーーーーーーあんなに暗い気分だったのに俺も現金なやつだな。

嫌なことがあっても頭では以外に下らない事もちゃんと考えていたりするもんだと、少し前向きになれそうな気もする。
コンビニの袋を片手に碧は家路をぶらぶらと覇気なく歩いた。
少し歩くと工事現場だったのか、昔から板状のフェンスで張り巡らされている通りに差し掛かる。結構な範囲で、高さがあるので中を窺うことは容易ではなさそうだ。以前は工事をしていたのかもしれないが、今はそのまま放置されている状態だった。その向こうはそのまま小さな山に面しているので、こちら側からしかフェンスに接する面はなかった。
普段は気にも留めず通り過ぎていたが、本当はここに何を建てるつもりだったのだろうか。と、不意に疑問がもたげた。
碧は足を止め自分の前に聳えるフェンスを見上げた。思い返せば、気付いた時にはすでにフェンスが張り巡らされていた。それを証明する様に、聳え立つフェンスは大分雨風に晒され、老朽化している。
立ち止まった碧は小首を傾げながら、そんな昔の出来事じゃ、考えても分かるわけがないかと諦めてその日は大人しく岐路についた。

「ちょっと、待って」
突然後ろから呼び止められ、碧は反射的に振返った。
大学の午後からの講義に出席し、何となく授業を受けてこのまま帰ろうとした所だった。
そこには知った顔が小走りに碧の後を追いかけて来ていた。ショートカットの小柄な彼女は名を長谷裕子といい、碧のバイト先のデパートに入っているテナントでバイトしていて、同じ大学ということもあり最近仲良くなったのだ。
「おう。どうしたんだよ」
「今日の授業はもう終わり？」
「終わったよ」
裕子はそれを聞くとまだあどけない幼顔を輝かせ、食事に行こうと碧を誘った。特にこの後用事もないし、一人で居るのも嫌だった

ので碧はそれに応じた。
二人で大学を出て、近くの喫茶店に入った。碧はコーヒーを注文し、裕子はモンブランと紅茶の組み合わせだ。よく来るこの喫茶店で頼むメニューは毎回同じだ。
モンブランを一口頬張り裕子は出し抜けに、
「聞いたよ。彼女と別れたんだって？」
また、その話しか。と、碧はあからさまにうな垂れた。そんな様子を見ても裕子は悪びれた様子もなく続ける。
「最近見かけても上の空で歩いているから何かあったのかとは思ったのよ」
その言葉に初めて碧は、他人から見ているだけで分かってしまうほど気落ちしているのが態度に出てしまっていた事に気がついた。
まいったなと、人差し指で頬を掻き、
「それ、誰から聞いたの？」
「豊君」
ーーーーーーーーーーあいつ余計な事しゃべりやがって・・・。
と、つい顔をしかめた。
以前碧は豊と裕子を合わせた事があった。それ以来二人が連絡を取っているのは知っていたがそんな話をするほど二人が親しくなっているとは思いも寄らなかった。
自分の辛気臭い話よりそちらの方が全然面白いじゃないかと話をそちらへ逸らしてみたが、
「別に。碧君が想像する様な仲じゃないわよ。お互い気が合うだけ。そんな事より、今は碧君の話じゃない。一体どうして？」
裕子の方が一枚上手だった。上手く話を戻され、碧には苦笑を貼り付けるしかなかった。始めから説明するのも億劫で、どうせ話すなら全部話しといてくれりゃあいいのにと心の中で豊に悪態をついた。
「彼女と俺の親友が出来ちゃってたの。だからもう終わりにしたんだよ」

「うそ！信じられない。酷い話だね・・・」
驚いた裕子はフォークからケーキを危うく落としそうになった。
「俺の方が信じられないっつーの」
と、テーブルに両肘をつき頬杖をついた碧は口を尖らせた。
「彼女とはちゃんと話したの？」
「何で？話す必要なんかないよ。だって俺は話すことないもん」
「でも、ほんの出来心だったかもしれないじゃない」
「出来心で俺の親友と出来てた、って言うなら尚更話すことはないよ」
碧が切り返すと裕子は何かを言い掛けてそのまま黙り込んでしまった。何かを言いたいのだが言葉が浮かんで来ない様で、視線ばかりが泳いでいた。
そんな裕子を見ながら、ふて腐れていた碧は頬杖を解きコーヒーを一口飲んだ。少し苦くて、もっとミルクを入れるべきだったと軽く後悔し、顔をしかめた。そんな様子を見ながら裕子がまた口を開いた。
「それで、碧君は後悔しないの？」
まだこの話題を引っ張るのかといささかうんざりして来て、
「しないよ。今は理由なんか聞きたくないしね。よし、この話は終わり。違う話しようぜ。」
と辛気臭い話にピリオドを打った。裕子は不満げな表情を浮かべていたが、大人しく応じた。
頷いた裕子を確認し、心の中で碧は安堵のため息を吐いた。せっかく人と一緒にいるのに嫌なことをわざわざ思い出す会話はしたくなかった。これじゃ一人で居るときとなんら変わらない。
しばらく会話もなく静まり返っていた二人だったが、碧が丁度コーヒーの御代わりをした所で裕子が切り出した。
「今日バイトあるの？」
沈黙に耐えかねた裕子が尋ねた。
「夜勤入ってるよ。朝までね。だから今日は酒が飲めないんだよな

ぁ」
「相変わらずだね。こないだ珍しいお酒飲んだんだって？」
豊のやつ、近況報告に俺の話してるな。と碧は思ったが、友達の会話なんて共通の友達の事が多いよなと、ぼんやりと思い、そしてまた、下らない事考えてる自分に可笑しくなった。
「豊が持ってきてくれたんだ。こんど裕子にも飲ましてやるよ。本当に美味いんだこれが。」
と、本日初の満面の笑みを向けた。つられて裕子もにんまりした。なぜなら、裕子も碧に負けず劣らず酒好きなのだった。急激に仲良くなったのは、もしかしたらバイトや学校が同じという共通点よりこちらの共通点の方が影響的に大きかったのかもしれない。
その後二人は酒の話題を筆頭にしばらく他愛ない話をし、喫茶店を出た。

自宅に帰り、母親の作った食事を簡単に済ませ、バイトの時間まで仮眠をとるため碧は自室に戻った。
たいした事もしていないのだか、ベッドに入るとすぐに心地よい眠気が訪れた。それに身を任せあっという間に眠りに落ちて行った。バイトに出るまで後三時間は眠れるはずだったが、眠りに落ちてまもなく碧は意識を呼び戻された。
聞きなれた携帯の着信音。それは間違いなくメールの受信音ではなく、着信の音だった。
これから三時間の深い眠りに全力投球しようと決めていた碧は、当たり前の様に鳴り続ける着信を無視しようとしたがいつまでたっても鳴り止まない携帯をしぶしぶ手に取った。寝ぼけ眼で確認した名前は、液晶にしっかり亜由美という文字を表示していた。
それを確認し、思わず飛び起きてしまった。眠気などは一瞬にして遠く彼方まで飛んで行ってしまった。ベッドに座り込みしばらく携帯の液晶を眺めていたが次第に不快な感情が心を占めていく。心がかき乱されるような気分だった。

ーーーーーーーーーー今さら、何の用だよ。五木と宜しくやってりゃいいじゃねぇか・・・

うんざりしながら碧は携帯をベッドから床へ放り投げた。以外に大きな音を立て携帯はベッドの下へ転がり込んだ。もしかしたら軽く壊れたかもしれないと思い、少し焦ったが確認する気力も起きなかった。

それからは眠りに就くことも出来ずベッドの中をごろごろする羽目になってしまった。

最初の内は怒りよりもショックが大きく、悲しい感情の方が大きかった。浮かんで来る疑問もなぜ？と言う言葉しか浮かんで来なかった位だ。悲しみから怒りを覚えられるようになったという事は、俺は立ち直って来ている証かもしれない。そしてこのままその感情を忘れて行くのだ。きっと。人間は忘れる生き物だから。怒りに変わる前に壊れてしまわなくて良かったのじゃないか。と何気なく思った。

怒りもあるがやはり悲しいのも本当の気持ちだ。一人になると今まで一緒に過ごして来た時間、そしてこれからも過ごすであろうと思っていた時間をどうやり過ごしていいものか。時間を持て余してしまう。一人とはこんなにも虚無感を感じるものだったか。誰かに問いたい気分だった。

少しでも眠ろうと一頻り努力をしてみたが力及ばずの徒労であった。無駄に時間が過ぎる一方で、頭は思考にとりつかれ目はぱっちり覚めてしまった。結局碧はのそのそとベッドから這い上がり、ベッドの下に落とした携帯を拾った。手に取りよく見てみると派手な音を立てて転がった割に傷は付いていなかった。

ちょっと早いが、ここでうだうだと考え込むのも嫌だったのでバイトに行く準備をし、早めに家を出る事にした。着替えを済ませ、下に降りて行くと今帰ってきたのか、碧の妹の理恵が丁度玄関に立っていた。最近の、高校生の代表の様な格好にメイクを施した理恵は碧を見るなり、元気いっぱいの笑顔を向けた。目いっぱい笑うと

えくぼの出来る理恵はどんなに化粧を施して大人っぽくしても年相応にしか見えないと碧はいつも思う。
「お帰り。こんな時間に帰ってくるとまた親父に怒られるぞ」
毎度帰りが遅く父親にどやされる理恵を碧は何度も目撃していた。が、当の本人は懲りた様子もなくけろりとしている。
「別にー。聞き流せばいいし。お兄ちゃんバイト？」
靴を脱ぎながら理恵は碧に視線だけ投げかけた。碧は理恵が退くのを待ちながら頷いた。時間はあるので足止めを多少くらっても今日はいらつかなかった。眠れなくなってしまって時間を持て余してしまったからである。
「バイトの帰りにアイス買ってきて。苺のやつ。あたしが学校行く前に帰って来てよ」
「太るぞ」
ずうずうしいお願いもしょっちゅうの事で慣れっこだ。
碧はからかい半分、理恵が気にしている事を言ったが今日は機嫌がいいのか鼻歌をうたいながらそのまま二階へ上がって行ってしまった。
そのご機嫌を分けて欲しいよと心の中で毒づき思わずため息を吐いてしまう。相変わらず気分は塞ぎ込みがちだった。
外に出ると、夜風が吹きぬけた。今日は風が強い。雲が流され、月が煌々と照らしていた。いつものバイトへの道をのんびり歩いて行く。見慣れた景色に、工事現場のフェンスが差し掛かって来た。不意にこの間の疑問がもたげて来た。
「気になるな・・・」
どうでもいい事なのだが、一度気になってしまうとどうしようもなくなってしまう。一体ここには何を造るつもりだったのか。そして現在はどうしてほったらかしになっているのか。
そしてどうして自分はこんな事が気になってしまうのか。よく分からないが、今さらながらに興味が湧いてしまう。
思わず足を止めて暫らく眺めてしまった。前回となんの変化もな

くフェンスは老朽化し色が変色してしまったままである。もしかしたら、中に入れる場所があるかもしれない。いけない事だと頭では理解していたが、思わず心は浮きだってしまった。小さな変化をも見落とさない勢いで、一通りフェンスを端から端へ確認して行った。そして気が付いたら一番端まで辿り着いてしまい落胆した。

「そう、甘くはないか・・・」

誰に呟くでもなく碧はため息を吐いた。その場に未練を残すように工事現場後を立ち去って、いつものコンビニに寄って、バイトへ向かった。

第二章　秘密

2秘密

「今日こそ、飲ましてもらうからね。約束だったでしょ。ついでに言うと、豊君ももう誘っちゃたからね。無理って言っても駄目だからね」

電話の向こうで、裕子がまくし立てるように言った。碧は思わず携帯を耳から遠ざけてしまった。興奮しているのか、必要以上に声が大きかった。電話の向こうの表情まで簡単に思い浮かんで来て、碧は頭を抱えた。

何の事を言っているかというと、裕子は碧が豊に貰った酒を飲ませろと言っているのだった。しかも碧に断らせないよう、念入りに豊まで誘ったと来ている。

別に飲ませないなんて言ってないのに。

「そんなに大きな声出すなよ。ちゃんと飲ませてやるって」

「やった！今日行っていい？」

「ていうか、もう豊も誘ったんだろ？聞く前から来る気まんまんだったんじゃないか」

そう答えると、裕子は楽しそうにけたけたと笑った。

「ばれた？実を言うとね。もう向かってるんだけどね」

「まじで？今、どの辺り？」

碧はギョッとして、だらしなくベッドに転がっていた上半身を起こした。人を呼ぶ予定がなかったので部屋が散らかっていたのだ。携帯片手に空いている手で脱ぎ捨ててあった、衣服を拾いクローゼットに押し込んだ。

「今ね、駅から碧君の家に向かってる所。」

後どのくらい？と向こうで裕子が豊に聞いているのが聞こえた。

今度は空いた手で昨日飲んだ空き缶をゴミ袋に詰め、換気をする

為窓を開けた。
「後十分くらいで着くから。何か買って行こうか？」
「おつまみなんか適当に買ってきて」
「分かった。じゃあ、待っててね」
妙に明るいテンションで裕子は電話を切った。碧は部屋着のまま少し部屋を片付け、下にグラスを取りに行った。
しばらくすると玄関のチャイムがなった。リビングのソファに座っていた碧は玄関の鍵を開けに向かった。今日は家に誰もいないので、多少騒がしくなっても咎める人はいないので一安心だ。
「おつまみ買ってきた。おじゃましまぁす」
裕子はコンビニの袋を顔の位置まで持ち上げ満面の笑みだ。その後ろにこれまた、意地悪な顔をした豊がにやにやとして立っていた。碧はげんなりしながら、二人を招き入れ二階に上がって行った。
「適当に座って」
碧はベッドの淵に腰掛、視線で二人を促した。裕子は腰を降ろしながら、落ち着きなく辺りをきょろきょろと見回している。
「意外とさっぱりした部屋だね」
簡単な感想を述べながら裕子は買ってきたおつまみを取り出しごそごそ開けた。碧は返事をしないまま、三人分の酒をついで二人に手渡した。思わず、裕子がにたりと笑ったのを見逃さなかった。やれやれ、と思いながら、
「乾杯。」
と一言。一口飲んだ裕子は、「美味しい」と感嘆し、一気に飲み干してしまった。この調子じゃ今日中に飲み干してしまうなと碧は苦笑の笑みだ。
「お酒足りないと思ってさ、余分に買ってきたんだよね」
「お前らうちで飲み明かす気かよ」
げんなりして、碧はおつまみのスナック菓子に手を出した。豊はケロッとして、
「どうせお前暇だろ？だから俺らで付き合ってやろうと思ってさ」

「そりゃ、どうもありがとうございますね」
「まぁまぁ、ふて腐れないで飲みなって」
無理やり注がれ、碧はこぼしそうになりながら酒を口まで運んだ。口に入った酒はそれでもやっぱり、一人で飲むより断然美味く感じた。こいつらはこいつらなりに心配してくれてるんだよな。と、思うが敢えて言わないでおこうと思う。
次第にアルコールが入って来ると、話題は絶え間なく飛び出してきて、話は尽きない。
「でね、私はやっぱり止めようって言ったんだけどね、どうしてもって言うから」
さっきから裕子はバイト先の話を興奮しながら語っている。
「手伝ってやったのか？」
「そう。断れなかったの。だから碧君覚悟しといて」
不意に自分の名前を挙げられ、呆けていた碧はぎょっとした。酔っ払った裕子は碧が話を聞いていなかった事に気が付いていなかった様子で、「だから」と一言一言を強調しながら言った。
「明日バイト先のロッカーを開けてみて。面白い物が入ってるから！」
「は？一体何の話？何が入ってるんだよ？訳が分からないんだけど・・・」
「話聞いてなかったの？じゃあ、教えてあげないんだから！」
何の事か分からず動揺する様子にやっと裕子は話を聞いていなかった事に気が付き、頬をぷうっと膨らませそっぽをむいた。どうやら怒ってしまったらしい。
話の内容なんかよりそちらの方がまずいと慌ててその場を取り繕うと、碧は裕子の空いたグラスに酒を注いで、
「ごめんって！まぁまぁ、裕子サン。飲んで下さいよ」
そんな様子が可笑しいのか、豊は笑いをかみ殺して、
「今のは、お前が悪いな。まあ、ロッカーを開けてからのお楽しみだな」

と、裕子に向かって言うと、裕子は機嫌が直ったのか悪巧みをする子供の様な顔をした。これでは、何の話だったのか聞き出せそうにない。諦めて、碧は頷いた。
「分かったよ。バイト行くまでお楽しみは取っておきますか。それよりさ、バイトで思い出したんだけど、バイトの行く途中にずっと前から工事が途中で放置されてる場所があるんだけど。あそこが何を作っていたのかお前ら知らない？」
ふと、バイト繋がりで思い出した碧は気になっていた質問をぶつけた。知る訳ないだろうなと思ったものの、ここ数日何故だか気になって仕方なかった。二人は小首を傾げて考えているが、裕子は場所がどこの事か分からなかったし、豊は知っていても今まで気にした事もなかったからもちろん知らなかった。
「その場所がどうしたの？」
何かあるのかと、好奇心旺盛の裕子はわくわく顔だ。
「いや、何もないんだけどね。一度気になったらすごく気になっちゃて」
「なーんだ。そんな話かぁ」
裕子はがっかりして、手にしたクッションを抱え込んだ。確かに、そんな話程度の事なのだが、碧は気になって仕方がなかった。ここ最近は亜由美達の事より、あの現場を思い出してぼうっとしている事の方が多い様な気さえするのだ。
「豊も知らない？」
「知らない。俺らが小さい時の事なら親が知ってるんじゃないの？」
「それが聞いてみたんだけど、知らないってさ」
やっぱり知らないか。と自然にため息が出てしまった。そんな様子を見た二人は顔を見合わせ神妙な顔をした。
なんだか、変な勘違いをされた様だと碧は悟ったがほうって置くことにした。根掘り葉掘り亜由美達の話題を詮索されるのはごめんだった。
案の定、裕子は碧が亜由美達のせいで可笑しなことを言い出した

のかと思ったが、何も弁解しない碧に投げる言葉が見つからなかった。
「そんなに気になるなら調べに行ってみるか？」
暫らくして、考え込んでいた重い口を豊かがあけた。
碧は弾かれた様に、落としていた視線を上げ、大袈裟に顔を横にぶんぶん振った。調べたいのだが何故か他の人に興味を持たれるのが嫌な気がした。
「いや、いいよ。別に大した事じゃないし。ただ通りがけに気になっただけだから、そんなわざわざ調べる程の事じゃない」
嘘を吐いた。意味も分からず気になって仕方がない。本当は調べたくて仕様がない。だけどあの場所は他の人のは教えたくなかった。なんでそんな風に思うのか。よく自分でも分からなかった。最近よく分からない事だらけだな。と、自分の事なのに何だか情けなくなってしまった。
「なんだからしくないよなぁ。そんな事気にしてるなんて」
「そう？俺、最近らしくない？」
タバコに火を点け、豊は呟いた。その発言にどきりとし、碧は全身が強張った。最近の俺はそんなに様子が今までと違うのか。亜由美が原因だという事を悟られたくなくて、自分では極力普通に振舞っていたのだがやっぱり伝わってしまうものか。
「まぁな。仕方ないんじゃない？そんな時もあるって」
思いっきり背中を叩かれ、思わず手にした酒を零しそうになってしまった。バツが悪そうな顔をした碧に裕子が言った。
「私が慰めてあげるって！」
「いや、遠慮しておくよ」
「碧君。時には謙遜が相手の好意を傷つけることもあるのよ」
裕子は本格的に酔っ払って来ている様だった。呂律が回らなくなって来ている。
「じゃあ、なんて言えばいいんだよ・・・」
そんな事を言われれば、返答にたじたじになってしまう。悪いが

碧はそんな気はさらさらないのだ。助け舟を求め豊の方を見たが、そ知らぬ顔だった。お前が振った話題なのに・・・。怨めがましく視線を送ったが豊は明後日の方を見ていて気付きもしない。
「裕子じゃ不満だって言うの？」
「そうじゃなくって、お前酔っ払ってるんだよ。水でも飲むか？」
「私、酔ってなんかない。豊君も何か言ってやってよ。碧君私の言うこと信じてくれないんだから」
顔を赤くした裕子は明らかに酔っていたが酒の勢いに任せ、怯む様子もなく豊にまで食って掛かった。内心碧は、標的が自分だけではなくなってほっとした。絡まれた豊は、碧の部屋の掛け時計に目をやり、
「もう電車の時間なくなるな。そろそろ帰ろう。裕子」
「もう！二人とも嫌いなんだから」
相手にされなかった裕子は悪態を吐きながらしぶしぶ帰り支度を始めた。
碧はほっとしながら、送るよ。と一言いい、胸を撫で下ろした。この手の話題はもう散々だ。
帰り支度を済ませた二人を送る為階段を降り、玄関を開け外に出た。
「凄い風だな」
天気は悪くないのに、風は強かった。強風と呼べるだろう。地面に積もった塵や砂が俟っている。目に入らないように自然に目を細めた。
「なにこの風。来るときはこんなに強くなかったよねぇ」
「ほんとだね。しかも向かい風だから歩きにくいな」
しかめ面で豊が相槌をうつ。言葉少なめに三人は駅までの道を、近道した。わざわざそのルートを選んだのは、工事現場跡地を通らなくていいからだった。
「私、ちゃんと歩けてる？」
不意に裕子が口を開いた。どうやら、歩いて始めて酔っている事

に気が付いた様で碧は可笑しくてくすっと笑った。
「微妙にネ。ちゃんと豊が送ってくれるから大丈夫だって」
不安げな表情を見せたので、碧は言った。そうね、と裕子は納得してまた黙って歩き出した。
近道をしたのであっという間に駅まで着いてしまった。裕子は名残惜しそうだったが「また明日、大学で」と言って、豊に連れられて、駅の改札を通った。今日は二人の後ろ姿が見えなくなるまで見送り、碧は踵を返した。
そして、来た道とは違うバイト先を迂回して帰るルートを辿る。どうしても工事現場の跡地に行きたくなっていた。俺、本当にどうかしてるな。気になって仕方がない。今までこんな事はなかったのに。
自分に疑問を持ちながらも、気持ちが急いていた。心なしか歩調も早くなる。強い風が行く手を阻んでもどかしかった。いつも寄るコンビニも素通りし、あのフェンスが見えて来る。そして、碧ははっとして歩みを止めた。
「嘘・・・」
呆然と呟いた。これは神様のくれた幸運だろうか。それとも見間違いか。手の甲で目を擦ってみたがそれは見間違いでもなんでもなかった。幸運だ！
「やった！」
小さく呟き、碧は問題のフェンスの位置まで駆け出した。フェンスの一角が、強い風に煽られ鈍い音を立てながらはためいていた。老朽化したフェンスにはこの強風に耐えられなかったのだろう。匍匐前進で進めば何とか碧にも入れる程の隙間だった。
それを目の前にし、ごくりと喉をならした。妙に鼓動が早くなる。中に入れるんだ。この中が一体どうなっているのか調べられるんだ。碧は興奮していた。勝手に入ってはいけないとは分かっているが、この衝動は止めることが出来なさそうだ。
こんな事が気になっておかしいという思いはもう湧いては来なか

った。むしろ。入って確かめなければならないという義務感すら感じて来てしまっている。
碧は辺りを慎重に見回し、誰もいない事を確認した。そして身を屈め、そこに出来た小さな入り口を潜った。土が服に付くのも気にならなかった。案外すんなり潜れ、碧は一息吐き体制を立て直した。そしてまず、視界に広がったのは、工事の為の鉄筋等ではなく、自然のままに広がる緑だった。
工事道具などどこにも見当たらない。視界に広がるのは目の間に聳える山へと続く小さな森だった。
「手付かづのまま撤退したのか」
小さく囁き、碧は森の奥へと静かに歩きだした。月明かりしかなく鬱蒼とした森に入って行くのに不思議と不安ではなかった。何か、こう小さな高揚感。なぜかわくわくしていた。強い強風に煽られ木々が不気味なざわめきを立てるがこの高揚感には何者も太刀打ち出来ないと思った。
辺りを再度見渡して見たが、これといって物珍しい物は発見出来なかった。広がるのは活き活きとした木々や草花のみだ。碧は月明かりを頼りに木々の間にわずかに出来た細い道を進んで行った。
一体何で、手付かづで撤退したのにフェンスは張り巡らされたままなんだろう。
新たな疑問がもたげたがそれはさほど気にはならなかった。気分は上々だ。ここ数日の中でこんなに気分が高揚したのは久方ぶりで、つい鼻歌まで口ずさんでしまう。
「このまま行くと山の斜面にぶち当たるのかな?」
独り言が洩れたその時、丁度視界が開けた。そこは碧の想像していた山の斜面ではなく、一面に広がる草原だった。背丈の低い草花が一面を敷き詰めて茂っている。その荘厳な情景に思わず感嘆の溜め息が洩れた。
凄い・・・。こんな身近な場所にこんな所があったなんて・・・。暫らくの間、呆けていた碧は草原の向こうに一箇所だけ背丈のある

大きな木を見つけた。不自然にその木一本だけがぽつりと、草原の中に佇んでいる様な感じだった。距離があるからか、そんなには大きくは見えないが近づいたらもの凄く大きい木なのかもしれないな、と碧は思った。

こんな所で過ごしたら気持ちいいだろうな。間違いなくここは自分の宝物の場所になるだろうと碧は思った。誰も知らない自分だけの場所。ふと、子供の頃秘密基地を作って遊んだ事を思い出した。今の気分はその時感じた気持ちと幾分変わらなかった。あの頃感じた、わくわくをこの年になってまで感じる事が出来る何て。人生は辛いことばかりではないのだなと前向きな気持ちになれるのを碧は実感していた。

強い風に煽られ、背丈の低い草花がそよそよと揺れる。思いっきり深く深呼吸をし、倒れるように仰向けに転がった。空には雲ひとつない。強風が雲をどこかに隠してしまった様だった。

「気持ちいい」

満面の笑みで明るい月を見上げる。地べたに大の字になって転がるのはいつ以来なんだろう。遠い記憶を呼び戻そうとしたが、それは霧がかかった様に表には現れなかった。

誰もいない、誰も知らない。こんな場所を見つけた自分はどれだけ幸運だろうか。思わず顔の筋肉が緩んでしまう。誰もいないのにそれを隠そうとしている自分に気付き碧は可笑しくなって思わず噴出してしまった。

静かに目を閉じてみた。感じるのは風に揺られ、草花のそよぐ音。自分の呼吸。そして瞼を通して感じる月の明かり。何故か不思議な感じがした。このまま大地に溶けて還れそうな気がする。背中に大きな息吹と慟哭がダイレクトの伝わって来る。何もかもなかった事にしてこのまま大地の一部になれればどんなに幸せだろうか。

それから暫らく、碧はただただそこに在るものだけを感じていた。

次に瞼を押し上げたのは、一時間ばかり後の事だった。そこには変

わらず明るい月が柔らかい輝きを纏って碧を見下ろしていた。
上半身を起こし、改めて周囲を見渡す。やはり、視界に入り込んでくる大木が気になってしまう。こんなに好奇心旺盛だったか、俺。疑念を抱くが、碧は先に行動を起こしていた。
さくさくと大木目指して歩みを進める。以外に距離がありそうだった。碧が歩く度に、緑の絨毯は何かを告げるように湿った音を鳴らした。大樹が近くなるにつれ、心なしか歩調は速まっていく。あと少しで大樹の全貌が現れる距離で、碧はハッと息を呑んだ。

終電間際の電車は人でごった返していた。遅くまで仕事をしていた人、飲み会帰り、寄り添う恋人。車内を見渡せばいろんな人が各々の思いを馳せながら一時の共有の空間に存在する。まったく知らない人が一時の間、自分と同じ時間を共有する。
「ねぇ、碧君はやっぱり忘れられないのかしら」
裕子は普段時間を共有する事のない、今後もする事はないであろう車内の人々に視線を投げながら呟いた。
「暫らくは、無理なんじゃない。碧からしてみれば大打撃だろうしな」
同じく豊も車内の人々に視線をやりながら力なく相槌を打つ。
「早く元気になって欲しいね。豊は彼女の浮気相手と話した？」
不意に裕子は問う。それに豊は肩を上下させ否、と呟いた。
本当は豊も五木と話してみようかと思ったのだが、それは敢えて止めた。碧が話す気がないのに第三者の自分が入り込んで話をややこしくしてしまうのを危惧しての事だった。それに解決するにはやっぱり碧が自分から行動を起こさなければ話にならないとも思う。ただ、碧に一向に動く気配いがないのが少々気がかりではあった。このまま、時間と共に風化させてしまうつもりなのか。
心の中に留まる感情を浄化させずにこのままでいるのはよくないと思う。それは何時しか綺麗な内部まで侵食し、真っ黒に酸化させ

てしまうのではないか。壊れてしまうまえに・・・。
どうにかしてやりたいのだが、本人にどうする積もりもないので豊自信も身動き出来ないのが現状だった。
「俺らは支える位しか今は出来ないんじゃない」
そう呟いた豊はほんの少し憂いを帯びていた。裕子はなにも言えず、黙ったまま豊の足元に視線を落とした。
明日大学で見かけたらいつも通り声を掛けよう。
裕子に今出来る、優しさだった。

第三章　胸裏

3胸裏

気が付いたら朝だった。寝ぼけ眼を、手を伸ばして掴んだ目覚まし時計にやり、一気に意識が覚醒した。

「やばい！遅刻だ」

慌ててベッドから這い出て、無我夢中で手近にあった服を引っ掴む。今日は絶対に落とせない講義があるのになんて失態だと、碧は舌打ちした。

適当に着込み、部屋の入り口に置いてあった鞄を拾い上げ猛ダッシュで階段を駆け下りた。階下で理恵とすれ違ったが、声を掛ける彼女の言葉を聞くことなく碧は外へ飛び出していた。

何時もの近道を全速力で走って五分。それから電車で三駅。そこからまた全速力で走って七分で大学に着く。計算通りに事が運べばぎりぎり間に合うかもしれない。

走りながら碧は計算し、そこからは自分の体力に賭けるしかないと無心で駅まで走った。

走った甲斐があって、予定より少し早い電車に乗り込む事が出来た。久しぶりに思いっきり走って息が上がっている。運動不足だなと思わず自嘲した。

上がった呼吸を落ち着かせるように胸に手を当て、流れる外の景色に目をやる。

流れに合わせ視線を泳がせているうちに呼吸は平常を取り戻して来た。電車のドアに寄り掛かりながら碧は昨日の夜を回想する。

「和田郁・・・」

思わず口を吐いて出てしまった言の葉に隣の乗客が怪訝そうに碧を一瞥する。しまったと思ったが後の祭りだ。碧は独り言の羞恥に乗客に視線を合わす事無く俯いた。

自分の足元を見つめながら碧は昨日の記憶を回想した。おそらく、一生忘れる事が出来ないのではないだろうかという程の衝撃だった。産まれて此の方、あんなに浮世離れした美しい、心奪われる様な情景は見た事がなかった。昨日の余韻に浸り呆けている所に、碧の通う大学がある駅名が車内アナウンスから聞こえて来た。

よし、と思考回路を切り換え碧は全速力で走る為意気込んだ。取り敢えず、間に合わなければ話にならないのだ。何の為に走ったのか分からなくなってしまう。

電車が停車しドアが開くまでの瞬間も、もどかしく顔をしかめる。開いた途端に碧は駅のホームから構内へ駆け出した。

物凄いスピードで駆け抜けていく碧に周囲のすれ違う人々が唖然と振り返るが、今はそんな視線に構っている余裕はなかった。

大学への道を一目散に駆けて行く碧を視界の端に捕らえた裕子はハッとして碧に声を掛けようとしたが、彼の後姿はあっという間に小さくなってしまった。

「なんだ・・・。元気一杯じゃない」

呆気に取られた裕子は立ち止まり零した。

いつも通り声を掛けよう。上擦る事無く自然に。そう決めていた裕子は幾分拍子が抜けてしまった。呆気に取られたまま足が止まっていた事に気付き徐に歩み出した。

何だか腑に落ちない感が残るが、深く考えずに碧が走り去った道筋を辿った。

久しぶりに激走した甲斐があって、希望の講義にすれすれ間に合った碧は、久方の運動に己の体力の低下に渋面していた。間に合ったはいいものの、息は上がりっぱなしでやっと落ち着いて来たと思ったら今度は激しい眠気と格闘する羽目となったのだった。

思い返すと昨日はあまり寝ていなかった。帰宅が午前様だったので、眠くても当たり前だった。講義の内容なんかそっちのけで、思考は突如昨日の晩に引き戻される。それはつい先程の事の様に鮮や

かに、鮮明に碧の心中をきらきらとした印象で埋め尽くして行く。

昨晩、大樹の側まで近づいた碧が目にしたもの。それは、大きな木を羨望の眼差しで微動だにせず、見上げる少女の姿だった。

自分が見つけた秘密の場所に先客がいたのだ。それだけでも心中は驚きの色に包まれたが、なによりまずその光景に息を呑んだ。

身動きせず、ひたすらに羨望の、そして憂いが見え隠れする眼差し。なぜ、そんな目でこの大きな木を見つめるのか。

碧は暫らく動くことが出来なかった。見つめる彼女は自分の存在にまったく気付く様子がなかった。木を見上げる彼女は一枚の美しい絵画から突如現れたかの様で視線を逸らす事が出来なかった。碧の周りだけ、そこは時を止めてしまったかの様に感じる。見つめる碧は暫らく何も考えることが出来なくなるくらい、強い何かを感じて呼吸をする事すら忘れていた。

強い風が彼女の長い髪をはためかす。薄茶色の薄色の髪がとても綺麗だった。それでも彼女は強風によって髪を乱されても構う事無く、羨望の眼差しで大樹を見つめて已まない。その眼差しには色んな色が含まれている様に感じとれた。寂しそうでもあり、慈しむ様な、それでまた愛しそうな。

そんな表情はかつて、誰の瞳にも見たことがないものだった。

呆けたまま、それを見つめてどれくらい経ったのか碧は分からない。大樹を見つめる彼女。その光景を一枚の絵画を見つめる様に動けなくなった自分。時がどれだけ経過したのか。ただ、ふと我に返ったのは彼女が見上げる瞳を落とし長い睫が影を作った瞬間。羨望と取れる眼差しに翳りが差した瞬間だった。

考える間も、自分の行動を躊躇する間もなく、碧は一歩踏み出してしまっていた。思考よりも先に乾いた口が開いていた。

「あの・・・！」

そこで思わず自分の行動に動揺の色を隠せなくなる。話しかけてどうする積もりなのか。見ず知らずの彼女に、こんな場所で。

後悔しても後の祭りだ。彼女は静かに碧の方へ振り返った。今まで横顔しか見えていなかった顔が碧の正面に移り込んだ。
そしてまた。碧は呼吸をする事を一瞬忘れた。想像以上の顔がそこにあった。
彼女は驚いた様子もなく、感情の読み取れない瞳で碧の事を見つめていた。動くことを忘れた碧の身体は、それと同じ様に彼女の読めない瞳を見つめ返すばかりだった。
最初にその空気を破ったのは、優しげに微笑んだ彼女の微笑で碧の止まった時間を引き戻したのだった。
脳裏に焼き付く様なワンシーンだった。

気が付けば講義の半分以上の時間が経過していた。しんと静まり返った教室に朝の明るい陽射しがとても気持ちの好い午前。
授業の話の殆どを聞いていなかった碧は何しに来たんだかと一人心中ごちた。
慌てて止まっていた手を動かしノートを取り始めるが、どうしても心此処に在らずだ。何度思い出しても昂る神経がちょっとだけうざったい様なくすぐったい様な、時間が経っても薄れない程の強烈、且つ、鮮烈な出来事だった。
動かしていた手を止め、窓の外に視線を移す。そこには、授業のない時間の学生達が中庭で談笑していた。そこには昨日の強風はもうなかった。
風がない事に少しだけ安堵する。風さえなければあの秘密の入り口は誰にも発見されないだろう、と碧は思う。自分と、そして、先客しか知らない場所。
彼女は和田郁と言った。
彼女にぴったりの名前だと思った。たどたどしく自分の名前を告げると郁は碧の名を反芻し、そして大樹を見上げた。
それにつられ碧も同じく大樹を見上げた。
強い風に煽られ広く枝を広げた木は、月の光を浴びながらかさか

さと不規則なリズムで鳴っていた。
記憶の彼方に碧がトリップしていると、辺りが急にざわめき出した。はっとして、周囲を見渡すと席を立ち次ぎの教室に移動しようとしている他の学生がいた。
しまった。授業は終わってしまったらしい。ずっと心此処に在らずだった碧は、必死になって間に合わせた授業から何の知識も吸収せずに終わってしまったのだった。
殆ど使わなかった教科書とノートを無造作に鞄の中に押し込み、周りの学生同様に席をたった。
次の教室に移動しようと広い校内を歩いている途中。次に受ける筈の教科が休講だという事を知った。
その後は特に何の履修も選択していなかった為、このまま帰ろうと踵を返す。すれ違う知人に軽く挨拶を交わしながら、碧は外に向かってのんびりと歩き出した。
突然、尻ポケットに入れてある携帯が軽快な音を奏で着信を告げる。驚いた碧は手に取った携帯を落としそうになりながら液晶に浮かび上がる文字を確認した。
裕子からだった。
「もしもし？もう終わった？」
こちらが何か言う前に喋り出すのは裕子の癖なのかもしれない。
「今終わったとこだけど」
「じゃあ、いつもの喫茶店で待ってるから。5分以内に来てね！」
じゃ、と言って裕子の電話は碧の返事を聞く事無く終話したのだった。携帯の液晶を睨み付け畜生と一言洩れる。ここの処、裕子に言い様に使われている様な気がするのは自分だけだろうか。
諦めの溜め息一つ、別に予定のない碧は裕子の指示通り喫茶店に向かう事にした。が、ここから喫茶店までは歩いて十分の距離がある。またもや碧は走ることを余儀なくされるのだった。
息急き切って喫茶店に駆け込んできた碧に裕子は満面の笑みで笑いかけた。

「時間通りじゃない」
その満足そうな笑みに遅れたら文句を言うくせに。と心中ごちた。
「ていうか、五分じゃ着かないって分かってて言ってんだろ」
裕子の向かいの椅子を引き碧は身体を滑り込ませた。真夏に何でこんなに暑い思いをして走らなければならないのか。額の汗を拭いながら碧は言った。
「だって。朝から思いっきり走ってたじゃない。走りたいのかと思って」
涼しげな顔してアイスコーヒーを一口啜った。碧も同じものを近くのウェイトレスに頼み裕子に向き合った。
「見られてたのか。寝坊してさ」
「で、間に合ったの？」
「ぎりぎりな」
あの激走を見られていたのかと思うと少しばかり恥ずかしいが、まぁ裕子だしいいかと思う。相手をこれっぽっちも意識していない結論に辿り着いた碧は手元にあったおしぼりを手にした。
「昨日ちゃんと帰れたのか？」
「まぁね。なんか朝起きたら二日酔いだったけどね。また今度三人で飲みに行こうって豊君が言ってた。」
「そうだな」
曖昧に返した。自分がいたらお邪魔な気がするのだが。という気持ちは言葉にしたら怒られそうなので黙っておいた。
「何だか今日は落ち着きないね」
暫らく黙り込んで碧を観察していた裕子は胡散臭げに、徐に口を開いて言った。
その鋭い観察力に一瞬碧の動きが止まる。慌てた様子で、
「そんなことないけど・・・」
否定するその声が軽く裏返ってしまった時点で碧の負け。
にやりと口元に厭らしい笑みを貼り付け、裕子は身体を前のめりにし、

「何か良い事あった？何？」
興味深深。今の裕子にぴったりの言葉だと思う。が、昨日の話は誰にもするつもりもない。さて、ここをどう切り抜けるか。いきなりの難題に思案の顔になる。
「ね、どうしたの？」
なかなか反応を示さないで黙り込んでしまった碧に裕子は首を傾げた。
やっぱり、少し可笑しくなってしまったのかしら。裕子は一瞬哀れな視線を碧に向けたが、俯いていた碧が顔を上げたので慌ててその視線を隠したのだった。
「良い事なんか、別にないよ。久しぶりに走ったから気分がいいだけ。たまには、運動しないとな」
少しばかり苦しい言い逃れだったかと危惧するが裕子は以外にすんなりと、言い分を受け入れてくれたようだった。
「そっか。じゃあさ、今日バイトだよね？」
「うん？」
裕子の話は脈絡がない。
「必ずロッカーを開けてね。絶対だよ」
「ああ、そういえば昨日何か言ってたよな。一体何が入ってるんだよ？」
不意に昨日の話題を思い出し、碧はグラスの回りに汗をかいたアイスコーヒーを啜った。案の定忘れていた碧を裕子は一瞥し、
「見てからのお楽しみ。必ず見てね。見ないと後悔するから」
意味深な含み笑いを洩らしながら裕子は本日初のモンブランを注文した。
それから暫し会話を楽しんでから碧はバイトまで少し眠りたいからと裕子と別れた。帰り際に、ロッカーの件の念を押され首を傾げながら帰りは急ぐ事無く帰路についた。
家に着くと、家族は全員出はらっている様でしんと静まり返って

いた。
特にすることもないので早々寝ようと、そのまま自室に向かう。一人になった途端押し寄せてきた眠気と戦いながら覚束無い足取りで階段を上り切ったところで本日2度目の着信がなった。
あまりの眠気に迷惑そうな顔をしながら碧は携帯の液晶に視線を落とした。瞬間、眠気は何処かに吹き飛んでいた。
「五木・・・」
それは亜由美とのことがあってから今まで一度も連絡のなかった当事者から初めての着信だった。
携帯を握る手に自然に力が篭った。苦虫を噛み潰した様な顔で、どうする事も出来ずディスプレイに浮ぶ文字を凝視していた。着信はコール短めに切れたが、碧にはとても長い時間に感じた。怒りとも何とも言えない感情が渦巻いていく。ただ分かるのは、もう考えるのが疲れたと言う事実。それ以上の感情は強制的に思考が拒否していた。
苦渋の面で自室のドアを開け、碧は転がり込むようにベッドへダイブした。
今さら・・・。もう遅えよ。
声にならない声が唇から洩れた。枕に押し付けた顔を上げないまま。次第に掻き乱された心は深い眠りへと誘われた。それは甘美な誘惑で、拒む事無く碧は身を投じた。

物凄い力で両肩を揺さぶられ、深い睡眠から意識を覚醒したのは夜の七時の事だった。まだまだ眠い眼を手の甲で擦りながら自分の顔がやたら汗ばんでいる事に気が付く。
「大丈夫？お兄ちゃん？凄く魘されてたけど」
重い瞼を押し開けてそこに理恵の滅多に見られない心配げな顔が、自分を上から覗き込んでいるのを確認した。
理恵の言うように相当魘されていたらしい事はぐっしょりと汗ばんだ、着ている衣類から容易に確認できた。

何か夢を見ていた気がするがそれは霧がかった様に何も思い出せない。軽く頭を振って理恵を見上げた。
「何か、夢見た気がするけど覚えてない。そんなに魘されてた？」
「うん。部屋の前通ったら聞こえた。部屋のドア半開きだったし」
視線をドアに移し、そういえば閉めないまま眠ってしまった気がする。
「お母さんが夕飯食べに下に降りて来なさいって」
「もう、全員帰って来てるのか？」
「お父さんは残業で遅くなるって」
ふぅんと小さく相槌を打って、碧は手近にあったシャツを掴んだ。あたしも着替えたら下に行くからと言って理恵は碧の部屋から出て行った。
出て行く後ろ姿を見送りながら碧は理恵が制服姿なのを知った。丁度帰って来た処に碧が魘されているのを発見したのだろう。規定の丈より大分短くなっているであろうスカートの裾をぼんやりと眺めながら思った。
何だか夢見が悪かったのか、冴えない気分で軽い溜め息を吐きながら碧は手にした洗濯したてのシャツに手を通した。
気だるい身体に鞭打つ様に階下へ降りると味噌汁のいい香りが鼻腔を擽る。
リビングのドアを開けると母が茶碗を手に戸口に佇む息子におはよう、と告げた。
「よく眠ってたわね。碧は今日バイトでしょう？いっぱい食べて行きなさいよ。」
言いながら母はご飯茶碗に白飯をてんこ盛りに盛った。碧はその量に少しばかり微苦笑を返した。
母の優しさは嬉しかったが、毎回バイトの日に食べさせられる量の多さにうんざりする。親切心からなので邪険に出来ないのはそれもまた碧の優しさだ。
食卓に着くとぱたぱたと音を立て、理恵が降りてきた。

三人揃った処で夕食を食べ始めた。
家族で囲った夕食は何だか疲れきった心を少し開放してくれた様な気がした。
食後のお茶を入れて貰って、碧はそれを片手に自室へ戻った。熱いお茶を片手に、部屋の中央に設置されたテーブルの横に座って無意識にテレビの電源を入れた。
テレビから賑やかな笑い声や弾んだ会話が流れている。その画面を見つめてはいるが、頭には何も入り込んでは来ない。碧はブラウン管のもっと遠くを見つめていた。
最近やけに色んな事があったなと改めて思う。辛いことや、心躍らす様な出来事。それはお互いに交わることのない感情をもたらすが故に一度に起こると許容量がオーバーしそうになる。上手い事、コントロール出きれば楽なのにと思うが実際そんな簡単には行かないし、行ったら行ったで物足りないのかもしれない。
それでも嫌な事は気分を十分滅入らせてくれるものだ。溜め息を一つ、熱いお茶を喉元に流し込んだ。染み入るような熱さが体内に流れ込んでいく感触がやけにリアルに感じた。
現実を感じても、それでも五木の着信については碧の思考はまだ考えることを頭の奥底へ押し込んだままだった。
いつの間にかブラウン管から自分の手元に落としていた視線を上げ、碧は熱いお茶を一気に飲み干し立ち上がった。
気持ちは一点に囚われていた。もう一度、あの秘密の場所に行こう。無性にあの場所に焦がれる自分がいた。
思い立つが吉日。碧は早速バイトに行く準備をする。バイトに行く前にあの場所に行って癒されよう。もしかしたら、また昨日の彼女にも会えるかもしれない。本当はどちらがメインの目的なのか自分でも判断し兼ねるが、取り敢えず早くあの場所に行きたかった。
さっさと支度を済ませ、碧はリビングにいる母に行ってきますとだけ伝え自宅を出た。
玄関の扉が閉まるのを背中に確認し、一呼吸。思わず走り出して

いた。先走る想いに、足は素直に反応していた。走りながら、先程までの気だるさが嘘の様に、気分が高潮してくるのが分かる。この一日の中でもころころ変わる自分のテンションに自嘲せざるを得なかった。

息せき切って辿り着いたそこは何時もと変わらぬ道であった。だけど、そのフェンスの向こうは誰しもが想像だにしない碧の別世界が広がっている。

急く気持ちを抑えながら用心深く辺りに誰もいないか確認する。じっくり周囲を確認した後、その狭い入り口に吸い寄せられるかの様に碧は身体を滑り込ませた。

服に付いた砂を払いもせず、一目散に草原へ続く森の細い小道を駆け抜けた。風のない今日は、そこはシンと静まり返っていた。碧の足音だけが響いていた。小道を抜けるとあの草原が見えてくる。碧は勢いよく転がった。

背中に大地を感じ、視界には瞬く月が雲に見え隠れする。思わず手を天に掲げ伸びをした。

落ち着く。

たった一人の空間で落ち着いていられるなんてここ最近ではなかった。家にいてもどこにいても一人でいることが苦痛でしかなかったのに、ここは安らぎを与えてくれる様な感じだ。嫌な事も小さな事の様で。

暫らく天高い月を堪能した後、碧は徐にあの大木の方へ首を向けた。寝転がって見る大木は横向きで、何だか可笑しかった。

いるかな・・・。

昨日の郁を思い出す。明け方まで、言葉少なく一緒にいた。その空間は気まずい様で、また充実していた。不思議な子だなと思う。よくここに来るのか聞くと郁はただこくりと頷いた。会話は単発であまり長くは続かなかったが、二人はじっと大樹を見詰めていた。その時間は長い様で短かった。なんだか、この秘密の場所がくれる安らぎに似ている時間を感じた。

「いる、かな」
何となく思う。別にまた会う約束何かはしていなかったが彼女は今日もいるような気がする。それはただの願望なのかもしれないが。
碧は上半身を起こし大樹を凝視した。が、如何せんここからでは距離がある。郁がいるかは肉眼では確認出来なかった。
行って見ようか少しばかり迷う。期待して行って、居なかったらがっかりしそうだったから。そうも思ったが、居たのに会わないで去るのはもっと後悔しそうなので碧は傍まで行く事にした。
逸る思いを無理やり押さえ込み、碧は普通を装いながら歩いた。肉眼でも木の根元が確認出来る距離まで来て碧は心臓が跳ね上がった。
彼女は今日もそこにいた。
昨日と同じに、大樹を見上げ佇んでいる。碧は郁を脅かさない様に近づいた。
そしてさり気無く郁の横に並び、
「今日も来てたんだね」
同じ様に大樹を見上げながら声を掛けた。
一瞬郁は目を見開いて碧を見詰めたが瞬時に柔らかい笑みを貼り付けた。そして一度頷いた。
そんな一つ一つの行動に碧の心は奪われるような感覚を覚える。
ばかだな、俺。懲りた筈なのに。
心中、自身に毒づいた。
隣の郁は昨日と変わらず、美しかった。儚げな美しさだと碧は思う。羨望を宿すその瞳も、風になびく長めの髪も、透き通る様な白い肌も、儚すぎてこの世のものとは思えないくらいに。
郁の横顔を盗み見していた碧は、視線を大木に移し、
「郁、この木が本当に好きなんだね」
「うん。本当に好き」
笑んだ顔に嘘はなかった。郁は碧の方に身体を直して言った。
「今日もね、来るんじゃないかなって思ったよ。君もこの場所が気

に入った？」
柔らかい声音。
碧は心拍数が上昇しそうになるのを無理して平静を装う。
「気に入ったどころじゃないね。こんな場所そうそうない。郁は、何時からこの場所を知ってたんだ？」
「小さい頃から。私しか知らない場所だったんだ。昨日まではね」
そう言って、郁は悪戯っ子の様にはにかんだ。碧は前髪を掻き揚げながら、
「昨日俺が勝手に入って来ちゃったからな。ごめん。迷惑だった？」
慌てふためいた碧は困った様な視線を郁へ投げた。そんな様子を郁は面白そうに眺め、少し首を傾いだ。
「そんな事ないよ。ここは私だけの場所じゃない。今まで誰もここに気が付かなかっただけだもの」
薄茶色の瞳を真っ直ぐに向けられ、碧の呼吸はまたもや止まるかと思った。直視するのは危険かもしれない。軽く挙動不審に視線を泳がせ、碧は抵抗せず視線を逸らした。
「俺は、誰にもこの場所のことは言うつもりないよ。安心して」
顔を伏せたまま碧は言った。郁がそれを一番心配しているのではないかと思ったからだ。自分だけの場所に他人が入り込んで来たのだ。今まで誰一人として気付かなかったこの場所に。思い入れが強ければ強いほど、感慨深い状況下にあるのではないかなと、碧は思う。
自分が逆の立場でも、自分のテリトリーに土足で入り込まれたらいい気はしないものだ。
「うん。ありがとう」
「俺、また来ても迷惑じゃない？」
「そんな事ないよ。迷惑だなんて」
「それなら良かった。ここさ、俺のバイトの行き帰りにいつも通るんだよね。最近、なぜかここが気になって仕方なかったんだ」
郁は思案顔になる。そして、

「もしかして秘密の入り口、見付けちゃったのね？」
視線の合わない碧の顔を覗きこみ、口角を引き上げた。どんな表情も様になる。綻んだ眼元は笑っていた。
「幸運にもね。小躍りしたくなったよ」
そう言って碧は笑った。
昨日より会話は弾んだ。思ったより、喋る子なんだなと碧は思う。昨日はやはりお互い初対面で気を張っていたのかもしれない。もっと話しをしてみたいと思った。
バイトまでの残り僅かな時間がもどかしい。
「ここはね、どんな時でも自分を受け入れてくれる気がするの。小さな悩みなんか吹き飛ぶ位、自分が小さく見えて世界の大きさを実感出来る。そしたら、自分より小さな悩みなんか吹き飛んじゃう。前向きになれる場所」
郷愁宿る瞳が月明かりに煌いて、碧は思わず息を呑んだ。そして、努めて冷静に自分の感想を述べる。
「うん。なんか分かる。昨日、草原に寝そべってる時に同じ様な気持ちを味わった」
それでは、何か悩みがあったの？とは郁は聞かない。薄茶色の瞳を碧に向け、ただ微笑んだ。
何も聞かれない事に碧はほっとしながらも郁の優しさに感謝する。時には触れない優しさだってある。碧の中のそれはまだそっとして置いて欲しい段階。
とても居心地がいい。郁との時間は荒んだ心を癒す空間の様に碧の心中を一色に染め上げて行く。甘い、媚薬。

第四章　転機

4、転機

人の人生というものは何処でどう展開して行くか分からない。だから面白くもあり、先が不安でもある。お呼びではない出来事もあれば、棚から牡丹餅と言う事も。

ただ果たして自分にとってそれがどちらの状態か瞬時にして判断出来かねる事も人生にはしばしばある事は間違いない。

そんな事を寝不足の頭で考えながら、碧はうつ伏せたまま枕に顔を半分以上埋め長い吐息を吐いた。

その判断出来かねる状態と言うのが、まさに一昨日から話題に上がっていた、裕子の言うロッカーの件であった。

中にあった物を碧は複雑な面持ちで、手にしたのは昨日の晩。秘密の場所で郁と別れ、後ろ髪惹かれながらも訪れたバイト先である。

裕子から念を押されていたので何かあるのは分かっていたが、まさか中に手紙と手作りのクッキーが入っているとはさらさら思いもしなかった。手にした瞬間、まさか裕子から？と血の気が引いた事だけは口に出すまいと心に誓った。

添えてあった手紙を無造作に開けて見てそれが裕子からではない事が分かり、碧は危惧していた事態は避けられたと安堵した。

差出人は裕子のバイト先の玲子からだった。碧も何度か顔を合わせている。

あまり興味が無かったからじっくり見た事は無かったが、確か理恵みたいに最近の若者の代表かの様な格好をよくしていて髪はいつも見事に巻かれていて感心する。

仕事で巡回している時に何度か声を掛けられた様な気がするが話しの内容までは流石に記憶にない。

枕に突っ伏したまま顔の前に持って来た手紙を半眼で見る。

そこには、短い文字が並んでいた。
簡単な内容である。携帯の番号が書いてあり、その横に連絡下さい。と綺麗な文字が綴られていた。そしてそれに添える様に控えめに差出人の名前が書いてあった。
さて、この状況が瞬時にして棚ボタなのか、招かれざる出来事なのか判断出来ない理由。それは簡単である。普通、こういう状況の場合大抵は棚ボタ。と喜ぶ者が多いだろう。ただし、碧は違ったのだ。正直、玲子には興味が無かったのだ。また、厄介な事に裕子の同僚と来ている。手紙を無視するのも忍びない。と言うより、無視するのも怖い様な気がする。かと言って連絡するのも変に期待させるようであまり気が進まないのも事実。
そうなると碧の中では招かれざる出来事の色が濃いかもしれない。気持ちは嬉しいのだが、純粋に喜べない辺り自分は摺れているのかもと自虐的な笑みを貼り付けた。
そしてこんな手紙を手にしつつ、思考が自然に郁の事を考え始めてしまうのを止める術を知らなかった。
別に郁とどうこうなるつもりもない。それなのに彼女は自分の心の大半を埋め尽くして行く。不思議な存在だった。
ーーーーーーーーーーー何時まで居たのかな。
疑問に思い、寝返りを打った碧は手にしていた手紙を床に放り出した。
これから寝るには窓から差し込む朝日がまぶし過ぎた。今日も炎天下だそうだ。快適に過ごせる温度に保った部屋で、熱くはないがカーテンを引いていても差し込んで来る朝日に眠りを妨げられ四苦八苦する。
何だか最近の俺の人生は走馬灯の如く色んな事が起きて過ぎさって行くのかなと、感慨深く思いタオルケットを目深に被った。朝日が遮られるとそのまま眠りに吸い込まれて行った。考えるのは起きてからにしよう。

午後からの講義を受けようと、まだまだ眠たい身体に鞭打ちながら辿り着いた大学。少し早めに来てしまい、碧は食堂で遅めの昼食にありついている処だった。
そこに満点の笑みを貼り付け駆け寄って来た裕子に、苦渋の面を貼り付けたのは五分程前の事。
碧が座る目の前の席を陣取り、頬杖を付く裕子は楽しげだった。それと対称的に、丼片手に碧の口に収まる牛丼は味を失くして行った。
「で？見たよね？電話した？」
来た。
瞬時に碧は固まった。今一番会いたくない人物に、今一番話題にしたくない話。もはや牛丼の味は皆無に等しくなってしまった。
頬の筋肉を引き攣らせつつ、
「いや、まだだけど・・・」
「早く電話してあげてよ。玲子さ、ずっと待ってたんだよ。碧君がフリーになるの。真剣なんだよ」
あまりの予想通りの展開に碧は苦渋の半笑い状態で、俺にどうしろって言うんだよと心の中でごちた。裕子が怖くて口に出せないのが情けないが。
「碧君だって早く新しい彼女見付けてさ、幸せになりなよ。玲子はいい子だよ！あたしが保障するって」
新手のセールスマンかよ、と思いながら碧は必死で口の口角を引き上げた。笑ったつもりだったが、かなりの勢いで引き攣ってしまったので笑顔になったかどうかは定かではないが。
「いや、俺別に彼女とか暫らくいらないんだけど」
「じゃあ、玲子はどうすんのよ？話しもしないで断るって言うの？」
先程までの満面の笑みを百面相の如く豹変させた裕子がずいっと詰め寄ってきた。やはり機嫌を損ねてしまった様だ。
面倒くさいなと思いつつも相手の機嫌をこれ以上悪くさせない様台詞を選ぶのも至難の業だ。

「や・・・そういう訳じゃないけど。今はそんな気になれないって言うか」
「そんな事言ってたら何時まで経っても元カノの事忘れられないよ」
「もう忘れたって。そんなに引き摺ってない」
「嘘」
「嘘じゃない」
ここで漸く二人は押し黙った。気まずい沈黙が二人を包む。確かに引き摺っていないなんて言い切れないのは碧も百も承知だ。傍から見てる裕子にもばればれな事も。
それでもこの状況に打ち勝つにはここは退けない処だ。
正直、自分の気持ちの整理がついてない今色々入り込まれるのは遠慮したい。
だだ、ちょっとばかり強引なこの友人は悪気がある訳ではなく、むしろ親切心でやっているので性質が悪い。こちらが素直に断れば悪者は碧になってしまうではないか。
困惑の顔を裕子に向けた碧は丼を手元に置いて、
「気持ちだけ有り難く受け取るよ」
「でも、玲子は諦めないと思うよ？」
「それはそん時考えるって。あ、もうそろそろ講義始まるぞ。移動しようぜ」
そう言って碧は早々に話しを切り上げた。食器の載ったトレーを返却し、二人は食堂から教室へ移動したのだった。
移動の間も裕子の仏頂面は顕在であった。先が思い遣られるな、とうんざりしたのは言うまでも無い事。

炎天下なだけあって日が沈んだ後も街はじっとりとしていた。まさに熱帯夜。ついさっきまで碧もエアコンのある快適な自室で過ごしていた。涼んでいた身体も外に出れば一瞬で湿気を纏う。不快には思えど嫌いではないかなと、思う。こういう感じが一番季節や自然を身近に感じる気がする。そういった感じが好きなのかもしれな

いなとふと思った。
手にした缶ジュースを飲み干し、近場にあるゴミ箱へ放り投げた。空き缶は弧を描きながら上手い具合にゴミ箱の中に身を隠した。
手持ち無沙汰になった碧は腕時計に目をやると、丁度短針と長針が重なった。約束の時間である。
碧は腰掛けていたベンチを後にし公園の入り口に向かった。家の近くの小さな公園で、碧の秘密の場所とは逆側に位置している。学校に行くのもバイトに行くのにも通りがからないこの公園は久し振りに訪れた。
待ち合わせに指定してきたのは豊である。つい先日免許を取得した彼は車を乗り回し足りないらしく夜のドライブに誘って来たのだった。
公園の入り口に立つと少し離れた所に黒いバンが止まっていた。
「よぉ。よくここまで来れたな」
思わず憎まれ口を叩く碧に悪気はない。
「ばかにすんじゃねぇよ。
今後の命は保障しないけどな」
豊も負けてはいなかった。碧は助手席に滑り込み腰を落ち着けた。
腰を据えた碧を確認すると豊はゆっくりとアクセルを踏んだ。視線は前にしたままで、
「裕子誘いに行く？」
鼻歌交じりでご機嫌に言った。すかさず碧は、
「まじ、今だけは勘弁・・・」
溜め息混じりに即答した。事の経緯を簡単に説明すると、暫し豊は黙り込んだ後碧にちらりと視線を投げて言った。
「お前、色恋沙汰たえな過ぎ」
「俺だって今はうんざりだよ。どうにかしてくれよ」
「自業自得だろ？」
「いや、俺何もしてないし」
そこで黙り込んだ豊は、カーステレオに手を伸ばしＣＤを再生し

た。軽快なリズムが車内を包み込む。暫し、音楽に聞き入っていた二人の沈黙を最初に破ったのは豊だった。
「で、どうすんの？その子」
「どうすんのも何もないよ。興味ないし。ただなぁ・・・裕子が問題なんだよ。断ったら俺悪者扱いだぜ。絶対！」
語気の上がった碧は手を顔に当ててぼやく。そんな様子を横目にしながら豊かはだろうな。と小さく呟いた。
裕子に悪気はないのは二人とも重々承知。だから余計に性質が悪い。
「ところで何処に向かってんの？何かもう俺知らない道だし」
ハンドルを握る豊は何かを企む様ににやりと笑んだ。
「行き先は今決まった！何も言わずついて来い」
意気揚々と言う豊についてくも何も車の中だしと突っ込むのを碧は敢えて止めた。
そして何だか嫌な予感がするという碧の予感は後程見事に的中するのであった。

なぜ、こんな事になっているんだろう。つい一時間ばかり前から働くのを停止してしまったのではないかと思われる自分の思考回路はいつまで経っても働く気配がしない。
いや、働くのを拒否していると言うのがこの場合は正しいかもしれない。
兎も角。今はっきりと分かっているのは自分が一杯食わされたという事だろう。
氷の溶けきったグラスを恐る恐る口にし、碧は気まずそうに視線を泳がせた。何処を見ていいのか分からないのだ。
深夜に豊にドライブと称し、連れて来られたのはファミリーレストランであった。
先陣切って店内に入っていく豊の後を遅れまいとついて行った碧は一瞬にして凍りついた。碧の周りだけ熱帯夜は何処かへ去ってし

まったのだ。
テーブル席に迷わず歩み寄って行く豊とは間逆に碧は足を止めた。そして本気で引き返そうか悩んだのは言うまでもない。そこに待ち受けていたのは、見慣れた裕子に本日も見事な巻き髪の令子。
完璧に豊に担がれた碧は愕然とし、全身から血の気が引く思いを久し振りに味わった。
こんなに突然ご対面させられても、正直話す事なんかない。更に目の前には裕子がいるのだ。下手なことは間違っても言えないではないか。
ーーーーーーーーこのやろう・・・
心中歯噛みしながら碧は裕子の前のベンチソファに腰を降ろした。相手に向けた笑みはやっぱり笑顔になっていたかの自信が持てなかった。
豊に非難の視線をあからさまに送ってやったが敵は素知らぬ顔。メニューを片手に知らん振りを決め込んで居る様だった。
恐らく裕子に泣き付かれたのだろう。と推測を立てるが今はそんな場合ではない。と、自覚をすると今度は背中に変な汗が吹き出て来た。
一体何を話せばいいんだ？
思考回路が鈍くなった碧は、口をパクパクと動かしているだけで、声にはならなかった。そんな様子を呆れ顔で眺めていた豊が、
「ま、固くならずに何か頼もうぜ」
妙な緊張感漂う空気を少しばかり軽くしたのが一時間ばかり前の出来事であった。

「今日の碧君大人し過ぎ！喋りなよ」
裕子の容赦ない一声に碧は頬を引き攣らせた。
この状況で一体何を喋ればいいのか？こんな事になるなら自分から電話でもすると言っておけば良かった。
内心嘆くがもう後の祭りだ。後悔先に立たずとはよく言ったもの。

「ああ、まぁ」
よく分からない返事を返し、碧はこの上ない位そわそわした視線を窓の外へ向けた。
店内に足を踏み込み一時間。終始この気まずい空気は変わっていなかった。
この一時間。気まずい思いをしながらどうすればいいのかを考えてみたが一向に打開策は浮んでこない。
むしろこの状況に苛立ちさえ感じ始めていた。何かと話しかけてくる裕子と令子に愛想のない相槌を返して来たが正直もう我慢の限界に達して来ているのは明らかで、碧のこめかみには青筋が立っているのではないかと思うほどに引き攣っている様な気がした。
「わり、俺便所」
そう言って碧は席から立った。
入り口付近に手洗いがあるのを発見し、碧はそちらへ向かった。
そこで一旦自分たちの席を振り返り、こちらからそこが死角になっているのを確認した瞬間。
咄嗟にそこから逃げ出している自分がいた。
勢いよく外へ飛び出した碧は、走って大通りに向かい暫らくして後ろを振り返る。
誰も気付かなかった様で誰も追いかけては来ていなかった。
みんなには悪い気もするが正直今はむかついていた。なんで俺がこんな目に合わなきゃならないんだよ。
ほっといて欲しい。
深い溜め息を吐き、碧は夜の通りに視線を泳がす。深夜だと言うのに、大通りは車の通りが激しかった。
おかげで簡単にタクシーを捕まえることが出来た碧は、自分の住む駅を告げた。
タクシーの背もたれに身を預け、碧は静かに目を閉じた。気持ちがどっと疲れを訴えていた。早く休まりたい。冴えない気持ちだけがいらいらと碧の心をささくれ立たせた。

暫らく無心で気持ちのもやもやに格闘していたが、何もかもが馬鹿らしく感じてきた碧は瞼を押し上げ流れる景色に視線を移した。
きらきらと輝く夜のネオン。それすらもが今の碧にはお節介に感じられた。もう、誰も構わないで欲しかった。これ以上余計な感情を抱え込むのが億劫で煩わしい。
亜由美の件依頼、碧の心はあまり自分を取り巻く環境や状況に興味を示さなくなった。
なるようにしかならないし、努力したって人の気持ちは簡単に変わるのだ。今は令子だって気があるかも知れないが、いつ心変わりするか分からないではないか。
そう思うと真剣に取り組む事すら馬鹿馬鹿しく感じる。正直在り難迷惑なのだ。
深い溜め息を吐き、碧はいらいらと爪を噛んだ。

深夜二時半を回っていた。まさか、こんな時間には居ないだろうと思っていた碧は、そこでまたもや遭遇し、心臓が跳ね上がる思いをした。
郁は今日もそこにいた。大樹を見上げて、佇んでいる。
さすがの碧もこんな深夜に郁がここにいるとは思わなかった。半ば呆然と郁の後姿を眺め、今日は誰とも関わりたくないと思っていたのに。無性に郁の声が聞きたくなった自分に顔をしかめた。
郁の姿をこの瞳が認めた瞬間、ささくれ立っていた気持ちがすぅっと落ち着いて行くのが分かった。こんな時間に郁がいる事への疑念すら、引き潮の様にどこかへ消えてしまった。
郁との関係はいい。お互い何も知らない。お互い何も詮索しない関係。ただただ、この場所が好きで来ているだけであって、待ち合わせなどもしない。そんな微妙な距離が今は一番楽だ。
少しばかり優しい笑みを取り戻す事が出来た碧は無言で郁の足元に腰を降ろした。
碧の存在に気付いた郁は軽く清純な笑みを碧に向けた。

そこに会話は必要ないのだ。
お互いに、ここで感じる。自然がもたらす癒し。そんな二人に会話は必要ないと碧は思った。郁の事はなにも知らない。確かに気にはなるが、それを口にするのは憚られたし、タブーの様な気がする。ここでは詮索はしないのだ。なぜなら、この関係が好きだから。居心地がいいから。お互いに干渉しない。
それは碧が勝手に思った事であったけど、何も、郁も聞いて来ないのだから自分と同じなのだと、碧は勝手に解釈する事にしていた。
人には触れられたくない事がある。
郁は大樹を見上げたまま、碧は足元に広がる草原の先を眺めたまま、二人は長い時間そのままで過ごした。
今夜の空も数個の星がきらきらと瞬いていた。枝葉の間から眺めるそれは至極の落ち着きをもたらす。
何時の間にか、碧は深い睡魔に意識を飲み込まれて行った。

次に碧の視界に飛び込んできたのは、朝日色に染まり上がった空を背景に今日も威厳に満ち溢れた大樹の姿だった。
「やべ・・・」
うっかり寝込んでしまった碧は慌てて上半身を起こした。朝焼けの空を見上げる。夜が明けたばかりの空は清々しい程に晴れ渡っている。今日も暑くなるのだろう。
碧は軽く伸びをし、まだ残っている眠気を追い払った。
空の明け具合から電車の始発は出ている時間だなと推測付ける。でも、別に碧の家はこの近所だし、郁が電車でここまで来ているのかは知らない。
そこまで考えて碧ははっと我に返った。
つい眠ってしまったが、郁はあの後帰ったのだろうか？
勢いよく辺りを見回して見たが、郁の姿は見付けられなかった。
前髪を物憂げにかき上げ、碧は視線を足元へ落した。足元の草の葉が朝露に濡れていた。

ーーーーーーーーーーどこに、住んでるんだろう
疑問に思えど、それを口にする勇気はなかった。この楽で安全な関係を失う勇気はないし、ややこしい事を考えるのはもう嫌だ。
ここに居る現実以外は全て消してしまいたい。全てを忘れて楽になりたかった。
これ以上傷つくのが恐いだなんて、これっぽっちも自覚してはいなかったが、悶々とした日々は現実から逃避するのに十分な口実だった。
もう少し休んでから帰ろうと、起こした上半身を改めて転がした碧は、見えるはずの空の場所に郁の顔を見付けた。
「あれ？居たの？」
先程探したときにはいなかった筈の郁が上から碧の顔を覗き込んでいる。碧は呆気に取られた様子で下から郁の顔を直視した。
透明な笑顔が碧に向けられる。
つられて碧の口角も上がった。
「俺、寝ぼけたかな。さっき郁はもう居ないかと思ったんだけど」
朝日が眩しくて、手を翳した。
「ずっと、ここにいるよ」
少し、悲しげな笑みに見えた。そして、また大樹を見上げた。その視線はもっと遥か上の方を映しているような錯覚を覚える。ふと、碧は思う。郁は、この大樹を通して何かを見ているのだろうか。
色素の薄い、長い髪がそよ風に吹かれていた。
それはやっぱり、一枚の絵画の様で現実とはかけ離れている様な錯覚を覚えた。

第五章　胸底

5、胸底

真夏の猛暑はこれでもかと言うほど続いている。蝉の鳴声が一段と夏と暑さを感じさせるていた。去年よりも明らかに今年の夏は暑い。碧は若干夏ばて気味の身体で寝返りをうとうと反転させた。

あれから、二週間が過ぎた。

何もかもが面倒で、碧はだらけた生活を送っていた。片付いていた部屋はあっと言う間に散らかっていったがそれを片付ける気力も起きなかった。

裕子に会うのが億劫で大学にもここ最近行っていないし、豊からの着信も出ていなかった。バイトだけかろうじてい続けていたが、令子に会う事のない深夜の時間帯だけのシフトに組み替えてもらった。

何もかもが面倒くさい。

部屋にある姿見に視線を流し、自分の顔にうんざりした。

――――――俺、こんなにやつれてたっけ？飯、飯食ったのいつだ？

一頻り黙考し、昨日の朝から何も口にしていない事に気が付いた。

冷房の効き過ぎた部屋の中は碧を刺激するものがない安全地帯だった。

ここ数日、部屋とあの場所だけを殆ど往復している様な生活になってしまった。

どちらも碧にとっては安全な優しい場所だ。煩わしい事も面倒な事もない。何も考えずに済む大事な場所。そして、郁に会える場所。

ここ最近、郁の事を考える事が多くなった。

郁は、いつもあの木の下にいる。いつもここにいると言うのはあながち嘘ではなさそうだと思う反面、余りに毎回郁がそこにいるの

で何をしている子なのか気にならないでもなかった。
それでも、お互いの干渉をしないと心に気めたのは自分自身だったし、郁の瞳の奥に宿る不安定な輝きを見詰める度に碧は疑問を飲み込まざるを得なかった。
何も聞いてはいけない。
自分の中の何かが訴えかけている様に思えた。
それに郁は何も聞いてこない。
ーーーーーーーーーー先に、進めない
虚ろな瞳を宙に漂わせたまま碧は窓の外から差し込む、初夏から真夏の日差しに変わったそれを薄ぼんやりと眺めた。
光のカーテンはきらきらと碧の上へ注いでいるのに、気分は宵闇の中だ。
ーーーーーーーーーなんか、最近俺一段と酷くなってないか？
何が酷いか、明確には分からないが何かが引っかかる。最近、妙に体がだるい。気分が優れないのは勿論だが、それ以上に身体に纏わりつく倦怠感。
自分の意思と身体ではない様なアンバランスな感じが否めない。
だがよく考えても、自分の身体に変わりはないのだから、と碧は結論付けた。あまり深く考え込むのは嫌だった。
ーーーーーーーもう少し眠ろう。
エアコンの効いた部屋で、夏掛けの毛布を頭から被り碧はベッドの中で縮こまった。

喧騒の中忙しなく行きかう人々の波に紛れて豊は携帯の通話ボタンを押した。
周りの喧騒をバックグラウンドに呼び出しのコール音が重なる。人の波をすり抜けながら、少し逸る歩調を何とか自制心で抑える。
ついに呼び出し音は留守番電話のガイダンスに変わってしまった。
深く長い溜め息を吐き、豊は終話キーを押下した。やっぱり、電話に出ない。あれ以来碧と全く連絡が取れなくなってしまった。裕

子に聞いても大学でも見かけていないと言う。
正直こないだの件は、やり過ぎたかと少し反省していた。碧の事を思ってした事だったが気が急いていたのかもしれない。まだそんな時期ではなかったのだ。碧は引き摺ってないと言うが本人が言うほど吹っ切れてはやはりいなかったという事だろう。
豊は浮かない表情で手にしている携帯に視線を落した。文明の機器も役割を果たせなければただの機械でしかない。もう一度ため息を吐き、止まってしまった足を今度は重たげに踏み出した。
繁華街を進みながら、少しばかり迷う。今のコールで電話に出なければ家まで押し掛けようと思っていた。が、実際そうなると躊躇してしまう。
親友と言えど、他人なのだ。自分がここまでお節介を焼いていいものなのだろうか。唯でさえこの間の令子の件で碧は怒っていると思われる。
どうしたものかと思い悩む中に、思い足取りはまたもや停止していた。
周囲の喧騒を遠くの音のように聞きながら豊は俯いた。
自分の爪先を凝視しながら、
ーーーーーーーやっぱり放っとけねぇ。
胸裏に若干の不安を残したまま碧の家の方面へ向かう。
何かしてあげられる事は無いかもしれないが、何もしないではいられなかった。迷惑がられてもいい。少しでも力に成れればいいなと思う。それは自分の中のエゴかもしれないが、助けたかった。

最近この秘密の場所に訪れる人が現れた。端麗な面持ちの少年を過ぎた青年。優しげな瞳を持っていて、それでも何かその瞳に翳をちらつかせる、彼。
ずっと独りきりの場所だった秘密の場所を共有する仲。思ったより、嫌な気分にはならなかった。どちらかと言うと、少し嬉しいかもしれない。

何だか気恥ずかしい気持ちもあるが、彼が何も聞かない事が有り難かった。
郁は今日も大樹を見上げる。愛しい樹にとまり短い寿命を嘆くかの様に、蝉が力の限り鳴いている。
こんな風に、生前泣いた事があっただろうか。
もう、あまり思い出すことも出来ないが、後悔だけが強く残っている様な気がするのだ。だから、この大樹の傍から離れてはいけない。いつも支えてくれたこの樹の傍にいなくては。
今日も、彼はやって来るかもしれない。
いや、絶対やって来る。妙な自信を持って郁は確信する。同じ波長、同じ匂い。お互い惹きつけられる何かがある。
高温の熱を発する太陽の熱を浴びた草々が、その熱によって暖められた風にそよいでいた。自然と、いつも彼がやって来る方角をぼんやりと眺めていた。
その行為がここ数日、癖になっていた。

豊が碧の家の前に辿り着いた時には、長い夏の陽も大分傾きかけている頃だった。
何度かインターホンを押すのが躊躇われ、出したり引っ込めたり繰り返していた右腕が宙に情けなく浮いた状態のまま、暫らく豊かは硬直していた。
碧に会った所で、どんな切り出し方をすればいいのか、何を話せばいいのかすら正直分からないでいる。
最近の碧の様な鬱々とした表情を豊は張り詰め、かつ緊張した面持ちで人様の玄関先で硬直していた。
暫らく葛藤した挙句漸く、ここに来た意味を思い出し、怯む手を押し出しインターホンを押した。何処にでもあるインターホンの音を聞きながら、変に心拍数が上がって行くのを感じる。
ーーーーーーーー友達に会うだけで何緊張してんだよ。俺。もっとしっかりしろって。相手は碧だ。

自分に叱咤するが、相手は普通の心理状態ではない事を思い出し、やはり心拍数は高鳴って行く。
ーーーーーーーー上手いこと、路を指し示す。立ち直る切っ掛けが碧には必要なんだ。
心中呟き、返答のないインターホンをもう一度押した。緊張の所為かやけに音がスローモーションに聞こえる。
こんな背を押す大役を果たして果たせるのだろうか。と不安が擡げるが、やはり親友としては放って置けない。
暫らくすると中から階段を駆け下りて来る音が中から聞こえて来た。随分慌しい。
やがて玄関の戸が勢いよく開いて、中から「はーい」と言う間延びした声が聞こえて来た。理恵の声だと悟った豊はほんの少しだけ安堵した。
「あれ？豊君じゃん」
「よ。久し振り。碧、いる？」
中を窺うように豊。
「お兄ちゃんならさっきまで居たけど、ついさっきどっか出掛けて行ったよ」
「あちゃ～、すれ違ったか。何処行ったか聞いてない？」
「聞いてない。最近ふら～とどっか行っちゃうんだよね。あんまり元気無いみたいだし。よく分かんないけど」
小首を傾げながらも理恵はあまり興味が無さそうに返答した。
出端を早速挫いてしまった豊は少し途方に暮れた表情で理恵の厚みのある睫の上に視線を注いだ。
「携帯に電話してみなよ。連絡取れるかもしれないしね？」
「そうなんだけど、最近電話に出ないんだよ。処でさ、理恵、碧が行きそうな場所知らない？」
「ええ～。お兄ちゃんの行動パターンなんて知らない。ああ、でもよくコンビニに行ってるみたいよ」
くるくると表情の変わる理恵を見ながら、豊は目が碧とよく似て

いるなと思った。
「コンビニか。ちょっと行ってみるわ。どの辺だか教えて」
思案顔の豊に理恵は、身振り手振りでコンビニの場所を教えてくれた。
豊はそんな理恵に軽く礼をいい、そそくさと藤家家を後にした。
足早に目的のコンビニを目指す。
果たしてそこに碧は居るのだろうか。またもや降って湧いた不安に顔をいぶかしめるが、歩く速度だけは落さなかった。これ以上擦れ違っては堪らなかった。
何が出来るかなんて高が知れているが、この間の事もきちんと詫びたかった。また、以前の様な常に前向きな明るい碧に戻って欲しい。それが一番碧らしい姿だと豊は思う。
暗くなった住宅街を足早に豊は、碧がよく行くコンビニを探した。
何が何でも今日中に碧との接触を計りたかった。

日が沈み幾分気温の下がった夜だったが、倦怠感の付き纏う身体にはこの夏の猛暑は大分きついものがある。
汗ばむ掌を乱暴にシャツの裾で拭きながら碧は気だるそうに住宅街の路地を歩いていた。ここ数日で痩せこけてしまった頬はこそげ落ち顔色を一段と悪く見せている。
そんな事には関心のない碧は自分が急激に痩せてしまった事にはまったく気が付いていなかった。身体の節々が軋む様な痛みがする。まるで風邪の引き始めの様な痛みだった。
力なく歩き、今日もまたあの場所へ向かう。きっと今日も郁はあそこにいるだろう。それだけが荒んだ心にほんのりと明かりを燈す。ただただ流れていく時間だけをあの場所で過ごす。そんな時間が今の碧の全てになってしまっていた。
かつての生活とは全てが一転してしまっていた。他は何もいらないものになってしまった気がした。誰かの心も、自分の心も。
辿り着いたフェンスの前に佇み、碧は秘密の入り口を見詰めた。

いつもここにくると少しだけ不安になってしまう。誰かにこの入り口を発見されてはいないか。この小さなフェンスの入り口に気付いてしまった人がいるのではないか。

それだけは一番避けたい出来事だった。この秘密の場所は誰にも踏み入れて欲しくなかった。ここは郁と碧だけの聖地なのだ。この場所と郁だけは自分を裏切らない。それだけが小さな支えなのだから。

フェンスに手を伸ばす前に辺りを確認しようとし、碧は久し振りの顔が自分を見つめて立ち尽くしているのを発見した。

「・・・豊・・・」

口の中で小さく呟いた声は少し離れた所にいる豊には聞こえなかっただろう。

立ち尽くしていた豊は厳しい表情で碧の前まで歩み寄って来た。思わず入り口を庇う様な角度でフェンスを背後にし、碧は対峙する。

なぜ、こんな所に豊かがいるのか。

碧には見当も付かなかった。

「あのさ、話があって探してたんだ。ここ数日電話には出ないし、大学にも来てないって裕子が言ってたから」

目前まで歩み寄って来た豊は徐に口を開いた。心なしか気まずそうで、視線が咬み合わない。

無言で碧は豊の顔を見詰めていた。

この間勝手に帰った事の文句でも言いに来たのだろうか。ふと、この間の光景が過ぎる。文句を言いたいのはこっちではないか。そう思った瞬間碧の表情は自然と引き攣った。

「だから、どうしたって言うんだよ。文句でも言いに来たわけ？何で勝手に帰ったかって？」

うんざりした様な口調で碧は吐き捨てた。慌てた様に豊の視線が碧を捕らえる。本日始めて合わさった視線の先の瞳は意志の通わないただのガラス玉の様だ。

「いや、そうじゃないんだ。

この間のことはこっちが悪かった。すまん。謝りたくって。碧の事を考えての事だったけど、浅はか過ぎたって反省した。あんな事があったんだからそう簡単に割り切って次とかは無理だよな。悪かった」

慌てて謝罪の言葉を捲し立てた豊は、碧の前で頭を下げた。今までにないくらい心臓の鼓動が大きく鳴っているのが耳の真横で聞こえている感じがする。碧にちゃんと伝わるのだろうか？口から心臓が思わず零れるのではないかと思った。

碧は豊の言葉の後、暫らく黙り込んでいた。

二人の間にいい加減気まずい空気が立ち込めてきた辺りに、漸く思い口を開いた。

「あんな事、しておいて、勝手な事言ってんじゃねぇよ。誰が割り切れてないって？俺がいつ引き摺ってるって言ったよ？誰もあんな女の事引き摺っちゃいねぇよ！勝手に決めんな！もう余計なお世話なんだよ！お前も裕子も！」

感情任せに怒鳴り散らし、碧は豊かの前から踵を返した。

「碧！！」

後ろから追って来た声と共に強い力で腕を引かれ碧は思わずその力によろめいてしまった。

そんな力を入れたつもりもなかったのだが、碧を引っ張った反動で豊自信もバランスを崩し、二人して地面に転がる羽目になってしまった。

「いってぇ・・・」

倒れ込んだ反動で思いっきり膝を地面に打ち付けた碧は思いっきり顔を顰め、地べたに座り込んだ。

碧の下敷きになった豊も訝しげに顔を顰めたまま碧の前に座った。

「お前・・・」

打った肘を擦りながら豊は小さく洩らした。今の反動で分かった事があった。

碧は確かに大柄な方ではない。しかし、小柄な方ではないのだ。

なのに、あの力のなさはどういうことだ？不意打ちとはいえ男があの位の力で倒れるだろうか。そして、下敷きになった時の重みだ。明らかに軽かった。
ハッとして豊は打った膝を擦る碧を凝視して始めて気が付いた。
ここ数週間一体どんな生活を送っていたらこんなにやつれるのか？思わず息を呑むほど碧は憔悴しきっていた。
覇気のない顔。張りのない肌。窪んだ瞳。以前の碧とは似ても似つかない面だった。
「お前・・・」
もう一度呟いた豊の瞳は大きく見開かれていた。
碧は擦りむいた膝から視線を上げ、不快感丸出しで豊を睨み上げた。
「いてぇよ。何だよいったい！」
「どうしちゃったんだよ。碧・・・何でこんなんなってんだよ！こんなんなる前に言えよ！」
豊はやせ細った碧の手首を持ち上げ、自分らの視線まで持ち上げた。
「は？何言ってんのお前。意味わかんねぇよ・・・」
力なく豊の手を振り解き碧は視線を逸らした。その力も余りの弱々しさに豊は締め付けられる思いを味わう。
こんな事になるなら、もっと早くに会いに来るべきだった。早くも後悔が押し寄せて来た。この尋常じゃない弱り方は一体全体どういうことか。こんなに憔悴する程碧の内面は弱かっただろうか。確かに辛い出来事ではあった。だがここまで憔悴するものか？少し前までの碧はもっと元気ではなかったか。
何か憤然としない物を感じながら豊は、視線を逸らしふて腐れている碧をぼんやりと視界に捕らえていた。
自分の親友は一体どこを彷徨っているのだろう。分からない事がただ悔しかった。救えない事が悲しかった。
どうしてあげればいいのか分からない事が雫になって零れそうだ

った。

「お兄ちゃん！いい加減起きなよ」

昼過ぎ、深い眠りから元気な声に碧は起こされた。

薄目を開けぼんやりとした視力で声の主を見やる。確認しなくとも相手は理恵しかいなかったのだが。

「・・・何？」

少し開いた瞳をまた閉じながら、碧は理恵に背中を向けた。まったく起きる気配を見せない実兄に理恵は頬を膨らませる。

「だから、起きてって！今日は日曜だよ。昼ごはんの時間だからお母さんが降りて来いって！！」

碧の肩を揺すりながら理恵は甲高い声を出した。そんな大きな声を出さなくても聞いているのにと、心中ごちりながら碧は気だるい身体を鞭打って起こした。

やっぱりどんなに寝ても身体がだるい。こんな事は今まで一度もなかった。前髪を掻きあげながら碧は深い溜め息を吐いた。

「すぐ行くって言って・・・」

覇気のない返事を返し、機嫌の悪い理恵を部屋の外に追い出した。

暫らくぼんやりとベットの上に投げ出した足を眺める。昨日出来たばかりの膝の傷が痛々しかった。

あの後結局豊とはそのまま別れてしまった。あのまま郁の場所にも行くわけには行かず、碧はそのまま家に戻ったのだった。

どうして周りは自分をこんなにも掻き乱すのか。何もかもが煩わしくって、豊が何をしたいのかも、何が言いたいのかも分からなかった。とにかく放って置いて欲しい。自分は何も引き摺ってなんかいないのだから。

昨夜の一抹を反復し、碧は不快な思いを噛み潰した。

やっとの思いでベッドから降りたが、歩くと少し膝が痛んだ。

階段を膝の痛みを堪えのろのろと降りて階下へ行くと、食卓には

昼食の準備が出来ており先に家族は食べ出している所だった。黙って椅子につくと碧の前にご飯茶碗が差し出された。
「あんたちょっと最近寝すぎじゃない？どこか身体の具合が悪いの？最近少し痩せたみたいだし」
茶碗を渡した母は碧の顔色を窺うように顔を覗きこんできた。碧は無言で箸を運ぶ。
「最近お兄ちゃんだらけ過ぎ」
理恵は箸を動かしながら碧の方を見ずに言った。何の反応を示すのも億劫で碧は聞こえない振りを決め込んだ。だんまりに限ると思った。次第に、会話は碧の事から離れ、ここ最近はどうだとか世間話をおかずに食事は進んで行った。碧は軽く耳を傾けながらも終始黙っていた。
「そういえば、この間並木橋の交差点で事故があったそうよ。理恵ちゃんも通学で通るんだから気をつけてね。あそこは見通しが悪いから」
「ああ、知ってる。あそこね」
母の心配をよそに理恵はあっけらかんと返事を返した。碧は会話には参加しなかったものの、並木橋の交差点を思い出した。
あまり碧は通らない道だが確かに見通しは悪い。
「事故にあった子ね、亡くなってしまったらしいわよ。若いのに可哀相ね」と、母は沈痛な面持ちで言った。それからあっと言う間に話題は違う方向へ進んで行った。
女の話はよくもまあ、こんなに飛ぶもんだと多少うんざりしながら碧は早めに昼食を切り上げて食卓を離れてしまった。
自室に戻り出掛ける仕度をする。今日こそは誰かに邪魔される前にあの場所に行きたかった。
昼間だから用心しなければ誰かに目撃される危険がある。そんな心配を抱えて碧は玄関を後にした。
一歩外に出ると真夏の陽射しが痛々しい程降り注いでいた。室内に篭ってばかりの碧の目には刺激が強い様にすら思われた。さんさ

んと照る太陽に背中を押される様に碧は覚束無い足取りで秘密の場所へ向かう。
頼りない足元が、遠くから見ると具合の悪い人に見えかねない。碧は意識しながら歩みを進めた。
久々にいつものコンビニに寄ろうと碧は一旦フェンスの入り口を素通りした。最近立ち寄っていなかったなとふと思った。
店内に入るとここは変わらず穏やかな雰囲気を保っていた。レジカウンターには店主が新聞を広げ読み耽っている。碧に気が付いた店主は、新聞から視線をあげ「いらっしゃい」と穏やかな声で迎えた。
碧は飲み物売り場に向かい水のペットボトルを手にした。余りの暑さに喉がからからだった。他には目もくれずレジに向かいお会計を済ませた。
何故か店主は碧の顔を見、一瞬不思議そうな顔をした。が、すぐにそれは何時もの笑みに変わったので、碧には分からなかった。
「有難うございました」の声に見送られ、碧はコンビニを後にした。
店の外で水を一気に飲み干し、ペットボトルをゴミ箱へ放り投げた。空になったボトルは軽い音を立てながら底へ消えていった。
碧は潤った喉を鳴らしながら、用心深く辺りを偵察し始める。昼の時間帯は通行人が夜よりも多い。用心に用心を重ねても足りない位だ。
暫らく陽射しのしたに突っ立て観察していると、先程の水が体の外に噴出して来るのが分かる。汗を片手の甲で拭いながら碧は入り口の中へと消えて行った。
素早く秘密の入り口に滑り込んだ碧は俊敏な身のこなしで体勢を直した。そこは碧の焦がれて已まない場所が広がっている。何時もとなんら変わりなく碧を受け入れる。
服に付いた土を軽く払い、さっきより軽い足取りで郁のいるだろう大樹を目指した。

視界の開けた草原に踏み込む。ここは外の世界の猛暑を感じさせない爽やかな風が吹いている。そんな気がした。青々と茂る草の絨毯の上を碧は軽い足取りで郁のもとに向かう。何度来ても毎回湧き上がる高揚感。隠し切れない程、溢れ出す暖かい気持ち。

外の世界では忘れてしまった感情。この場所でだけ動き出す碧の世界。安心と言う名に包まれた世界。

ほら、辿り着いたそこで迎えてくれるのはいつもと変わらない慈愛に満ちた優しい笑顔。

お互い何も知らないから向ける事の出来る優しい笑顔。本当は、それは寂しいことなのかもしれないが、今の碧にはそれこそが必要なのだ。

そよぐ風に靡く髪を押さえる郁の手は思っていたより細かった。真夏の陽射しに眩しさを覚えながら、視線を逸らす事は出来なかった。

「今日は来たんだね」

一拍空けて郁は碧に言った。

と言う事は、郁は昨日も来ていたと言う事だ。豊に邪魔された碧は来ることを断念せざるを得なかったが、郁の言葉を聞いて悔やまれた。

一人で居させたのか――――――

可哀相な事したな。と碧は思った。だが碧がここに来るまでは郁は常に一人だったんだなという事に今更ながら気が付いた。

それに特に約束などしている訳ではない。

そんな感情は逆に迷惑かもしれないと碧は思い直した。

「ここは涼しいよな。外の暑さを感じないな」

碧が柔らかい草の上に腰を降ろすと、郁もそれに習った。

「そうだね。ここは本当に居心地がいいよね」

郁はそう言って愛しそうに大樹を仰いだ。その上には雲一つない青空が広がっていた。

「何もかも忘れてここにずっといれればいいのにな・・・」

遠い目をした碧に郁は曖昧な笑顔を向けた。
「本当にね」
そして郁は同じ様に遠い目を空の彼方に向けた。
郁には一体どんな思いがあるのだろうか。ふと碧は思う。
碧にも考える所や思いというのがある様に、郁も胸裏に何か抱えているのかもしれない。郁は何を求めてここにいるのだろうか。
そんな事を考えて自分が何を抱えているのかもよく分からなくなってしまった碧は他人の事等考えても分かる筈がないと早々に諦めた。
「日が、沈み始めたね」
空を見上げたまま郁は呟いた。
また、翳りが垣間見えた様な気がしたのは碧の気のせいだろうか。
返事をする事を忘れて碧は横から不躾なほど郁を凝視していた。
やはり近くで見ても郁は浮世離れした雰囲気で、何度ここで顔を合わせても初めて郁を見つけた時の記憶がフラッシュバックしてしまう。その度に碧の肺は呼吸を忘れそうになるのだ。
本当は気になっているのを碧は気が付いていた。色々聞いてみたいことはいっぱいあるのだ。だが、それをしないと決めたのは碧自身だったし、なによりこの関係が崩れてしまうのが心配だった。
もしかしたら郁はもう此処には来なくなってしまうかもしれない。
そう思うと、考えなしには何も行動が取れないと思った。碧は上の空で郁の言葉は耳に入らなかった。
「さっきからどうしたの？何か顔についてる？」
見詰め過ぎた。と碧は郁の言葉に慌てて視線を逸らした。訝しげに小首を傾げる郁の様子が想像以上にかわいいと思った。
そんな胸裏を見透かされないよう碧は郁と視線を合わせないよう努めた。
「いや、なんでもない」
少しばかり動揺が声の響きに含まれてしまった様な気がして碧は罰の悪い顔をした。

「変なの」
そう言って郁は可笑しそうに小さく笑った。こんな瞬間が今の碧には一番の幸せに感じられた。重みのない、軽い差し障りのない会話。
重いことはなにも考えたくないし、もう考えられない。他の誰かの考えを恩着せがましく押し付けられるのも、傷つくのもうんざりだ。
碧はここでしか出なくなってしまった笑顔を郁に惜しみなく向け、束の間の会話とこの瞬間を楽しんだ。この瞬間だけが碧の中で時を刻んでいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7236a/

吹き抜ける風

2010年10月28日06時46分発行